

9
25

名士の父母

版蔵堂武文



名母の父母



東洋堂

寄贈本

寄



名人像肖

- 鳩山 菊子
- 桐 幸子
- 棚橋 絢子
- 坪井 信良翁
- 二見 きん子
- 小金井 幸子
- 高橋 白山翁
- 澤 簡徳翁
- 村田 直景翁
- 益田 風翁

子 幸 樹

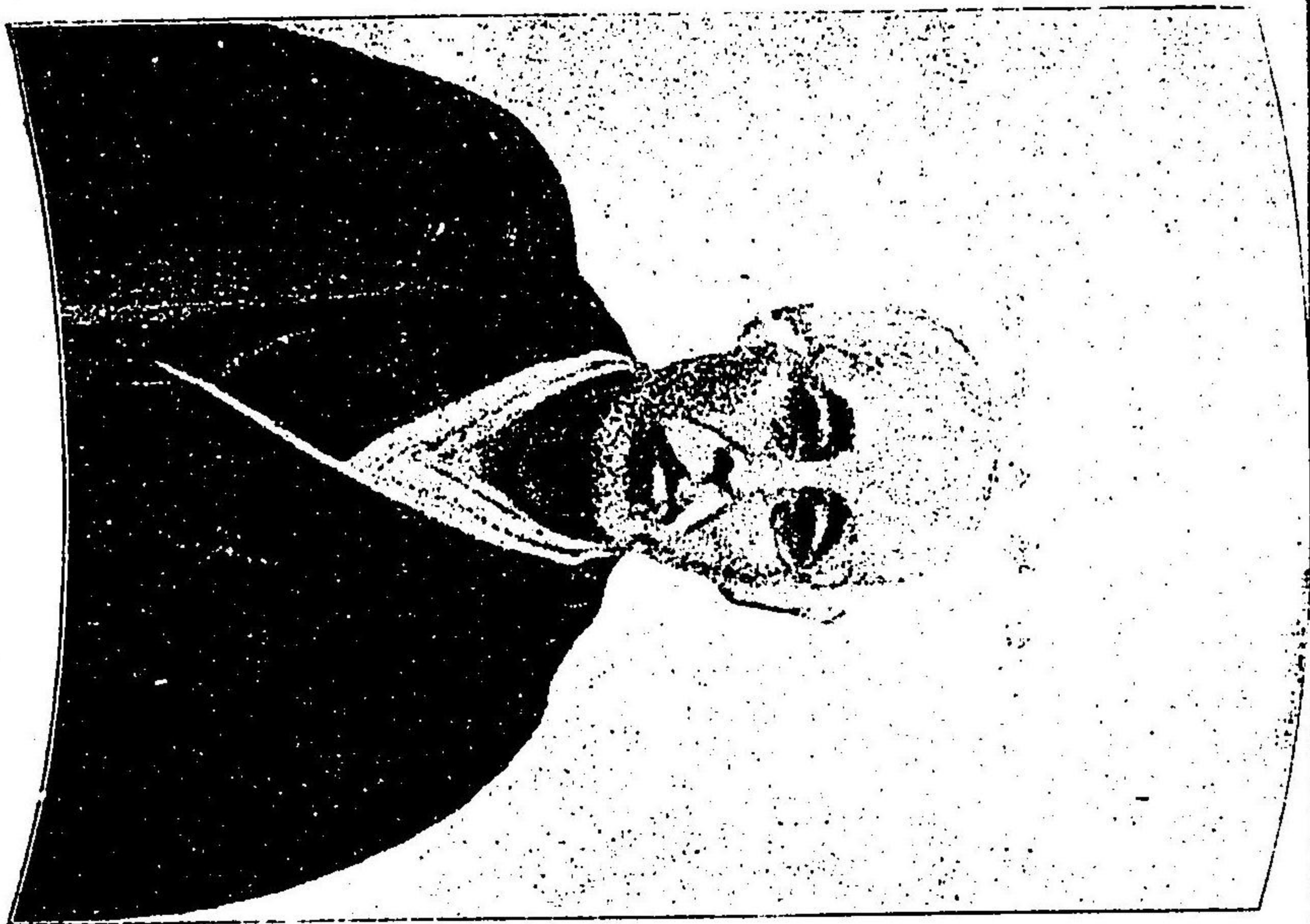


子 菊 山 樹



名 人 像 肖

- 鳩山 菊子
- 小 金 井 幸 子
- 榑 幸 子
- 高 橋 白 山 翁
- 棚 橋 絢 子
- 澤 簡 德 翁
- 坪 井 信 良 翁
- 村 田 直 景 翁
- 二 見 さ ん 子
- 益 田 風 翁



坪 非 信 瓦 籍



棚 橋 柳 子



子 幸 非 金 小



子 人 き 見 二



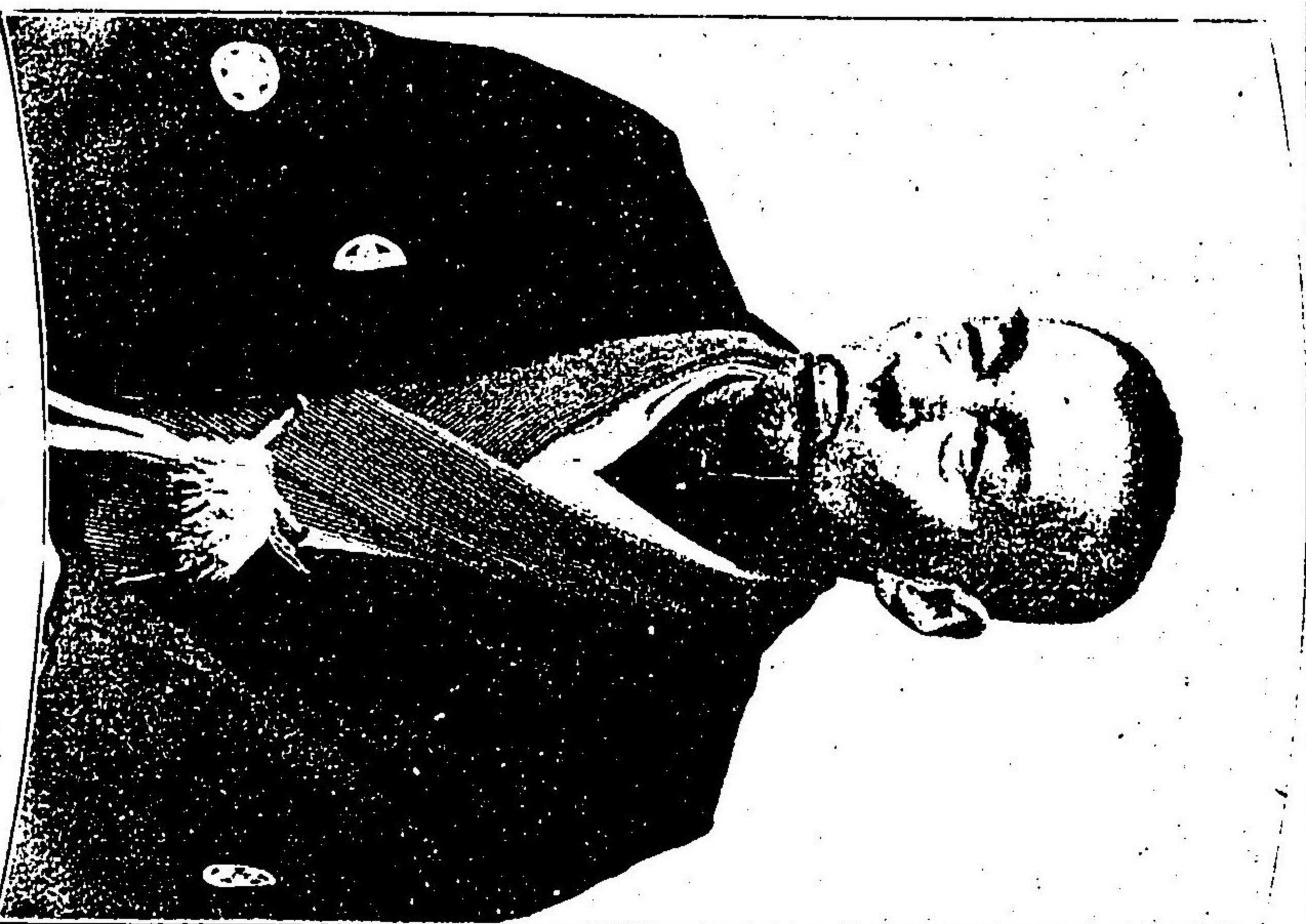
翁 德 節 澤



翁 山 白 橋 高



翁 鳳 山 益



翁 景 直 田 村

凡例

一本書は曩に讀賣新聞紙上に連載したりしを、今改めて一卷とせるもの也。斯く取纏めて刊行するに就ては、其配置上順序内容等に訂正せまはしき箇處も少なからざりしかど、元より誰を前にし誰を後にすると云ふが如きは、編者の本意とする處ならねば、今は暫く彼の紙上連載の儘に爲し置きたり。

一當今世上に雄飛する名士は、其數決して少なからず、其父母にして目下猶健全なるもの、又少數ならざるべく、本書に收めたる諸氏は實に其一小部分に過ぎざらむ。されどこれは元より新聞紙上に執筆せる爲、其人選とても思ふが儘ならざりに由れり。他日若し此種のものに筆を執る事あらば、期して其遺漏を補ふべき也。

一本書編纂の主旨は、務めて諸名士が幼時の教育如何を明にし、兼て其父母が閱歴を弘く世人に紹介せんとせらるにあり。元より事に由り人によりて、其筆法一ならずと雖も、編者は出来得ん限り、常に此點に注意したり。幸に大方の諸君本書を繕きて、家庭の一端に利益せらるゝ事あらんか、編者の微意始めて全かるべきなり。

一本書の編纂に就ては社友町田柳塘多田錠太郎の二氏、大方ならず盡力せらるゝ處ありたり、茲に刊行に際して深く之を鳴謝す。

明治癸卯陽春四月

讀賣新聞社編輯局に於て

編者識

名士の父母

目次

榊 幸 子(醫學博士榊順次郎氏の母).....	一頁
鳩山 菊 子(法學博士鳩山和夫氏の母).....	二頁
棚橋 絢 子(文學士棚橋一郎氏の母).....	三頁
坪井信良翁(理學博士坪井正五郎氏の父).....	四頁
高橋白山翁(法學博士高橋作衛氏の父).....	五頁
徳富一敬翁(國民新聞社長徳富猪一郎氏の父).....	五頁
川村湯香子(伯爵川村純義氏の母).....	六頁
二見きん子(大阪西成製紙會社社長二見昇の氏母).....	七頁
小金井 幸 子(醫學博士小金井良精氏の母).....	八頁

名士の父母



柳幸子

（醫學博士柳順二郎氏等の母）

安藤紫陽
箕輪撫鬘 共編

柳幸子刀自は我國精神病の開祖として其名海外にまで聞
たる故醫學博士柳椒氏婦人科専門の醫學博士柳順二郎氏醫
科大學教授醫學博士緒方正規氏へ嫁したる故小梅子醫科大
學教授醫學博士岡田和一郎氏夫人とく子及び醫科大學助教
授柳保三郎氏等五人の母君なり其男子三人は斯くまで打捕

名士の父母目次終

村田直景翁（畫家村田丹陵氏の父）	八九頁
森 峰 子（醫學博士森林太郎氏の母）	〇〇頁
志 賀 淑 子（農學士志賀重昂氏の母）	〇三頁
澤 簡德翁（海軍少將澤實漢氏の父）	〇三頁
梅 薫 翁（法學博士梅謙次郎氏の父）	〇三頁
岡 野 春 子（法學博士岡野敬次郎氏の母）	〇四頁
益 田 鳳 翁（實業家益田孝氏の父）	〇四頁

刀自の父君は山田一郎とて、剣法の師たり兼ては漢法醫を業
 として世を安らかに送りたる人なりけり。刀自は其家に人と
 成りて年頃の折より御三家の一たりし清水家の奥に仕へ、
 未より上りて御使番の頭まで進みしが斯うまで異例の出世
 なりと謂ふべし。
 實に此三男二女の輔育者として、其父君よりは事ろ力ある人
 なりと謂ふべし。
 二人はこれにた名も芳はしき博士連の許に嫁きて能く内助
 の功を奏し夫君をして天晴後嗣の患なからしめたるに至れ
 るは幼時の教育與つて力ありしは明かなる事にて世人は必
 ずや其養育者の面影を知らんと欲するならむ。幸子刀自は
 實に此三男二女の輔育者として、其父君よりは事ろ力ある人
 なりと謂ふべし。
 (一)

を爲し、程ありて其素行いづし、か邸内奥女中の模範となり
 到る處に善き噂のみ高かりける程に頃しも安政の大地震に
 て家の内の住居叶は、三十日餘も野店の假住居にありける
 事とて思ひも奇らぬ大病を惹起し止むなく暇を乞ひて邸を
 出て親許にありて暫時は其療養に力を盡す事となりき。
 斯る折しも故俣氏等同胞の父君たりし故神神翁は刀自の人
 となり並々ならぬを見込み清水家用人の手を経て結婚を申
 込みしが此時刀自は年既に二十七にして盛過ぎたる頃なり
 ければ心密に他家への縁組を思ひ絶ちたりし事とて、翁翁よ
 りの申込みも情なく拒みたる事再三なりしが強てとの懇談
 なか、否むべうもあらざりければ刀自も漸う納得して遂
 (三)

うて、刀圭界の爲に全力を盡し、大方ならぬ聲名を博しつ、女子二人はこれに名も芳ばしき博士達の許に嫁ぎて、能く内助の功を奏し、夫君をして天晴後顧の患なからしめたるに至れるは、幼時の教育與つて力ありしは明かなる事にて、世人は必ずや其養育者の面影を知らんと欲するならむ、紳幸子刀自は、實に此三男二女の輔育者にして、其父君よりは寧ろ力ある人なりと謂ふべし。

(二)

刀自の父君は山田一郎とて、劍法の師たり兼ては漢法醫を業として世を安らかに送りたる人なりけり。刀自は其家に人と成りて、年頃の折より御三家の一たりし清水家の奥に仕へ、お末より上りて御使番の頭まで進みしが、斯うまで異例の出世

を爲しと程ありて、其素行いつしか邸内奥女中の模範となり、到る處に善き噂のみ高かりける程に、頃しも安政の大地震にて、家の内の住居叶はず、三十日餘も野店の假住居にありける事とて、思ひも寄らぬ大病を惹起し、止むなく暇を乞ひて邸を出て、親許にありて暫時は其療養に力を盡す事となりき。斯る折しも故俶氏等同胞の父君たりし故紳紳翁は、刀自の人となり並々ならぬを見込み、清水家用人の手を経て結婚を申込みしが、此時刀自は年既に二十七にして、盛過ぎたる頃なりければ、心密に他家への縁組を思ひ絶ちたりし事とて、紳翁よりの申込みも情なく拒みたる事再三なりしが、強てとの懇談なかく、否むべうもあらざりければ、刀自も漸う納得して、遂

(三)

に緯翁と千代の契を結ぶに至りぬ。

緯翁は舊幕臣なりしが、素より家はさばかり豊かならず、現に刀自を迎へし頃の如き、家財の重なるものとは、少やかなる。竈の外現金一兩二分を懐裡にせる程の状態にありしが、然も翁はよく貧困と闘ひて、日夜勉強に心を委ね、當時學界にさる者ありと聞えたる彼の杉田梅里の塾に入りて、頻りに蘭學を研究しき。一生夫は持つまじと心竊かに決したる刀自の切なる請にほだされしも、一つは學に熱心なりしを此上なう愛で

(四)

の上なりけり。家の貧困已に斯の如かりしさへあるに、當時特に家内に入込みたる紛擾ありて、其荆棘を切開かんには中々の困難あり、並

々の男兒なりとも容易に手を下すべうもあらざりけんを、刀自の勇しき、密に其身をなきものと期して、能く其難事を防ぎ得たりき。左に事の概略を説かむ。

夫と定まりたる緯翁に、腹違ひの弟一人ありしが、紛擾の源はやがて此人の仕業なり。素より餘り心正しき人にはあらざりけん、常に其母なる人と共謀して、見事緯翁の一家を乗取らんもの、絶えず苦肉の計略を廻らし、事あれば常に何等かの妨害を加へざるはなく、果は目的の爲眼中義理ある兄もなく、機會あらば緯翁を亡き者にも爲し兼ねまじき氣色も見ゆれば、刀自の心勞大方ならず、密に思ひけるやう、夫をして永く此家に留まらしめば、行末如何なる椿事を惹起さん、圖りがた

(五)

きに、素より腹黒き人の、此方より下手に出たりとて、逆も心打
解くるやうの事なきは明かなれば、一刀兩斷の策を取るに如
かずと遂に夫に勸めて家を逃れしめ、其留守の間は其頃僅か
に五歳の俶氏と三歳なりし順二郎氏との二人を相手に堅守
些かも怠る處なく、殊に身は小梅子を姪れる頃なりしが、何時
敵の不意に出てもも圖りがたければ、常に一振の懐劍と目潰
一包を用意し、かねては萬一の事もやと書置一通をさへ肌身
に添へて、如何なる嚴談も物ともせず、能く孤城を守りにき。
緋翁の弟なる人は刀自の決心既に斯の如く、到底動かすべき
にあらざりしを見て、遂には白刃を揮ひ腕力に訴へてまでも
其家を去らしめんとしたりしが、女の一念頑として如何なる

脅迫も其心を奪ふべきにあらず、斯る程に敵も遂に一策を案
じ、或日また頑是なき順二郎氏を取て押へ朱鞘の一刀其胸元
に突付て、咄嗟刺殺さんず擬勢を示し、斯ても此家を引渡さ
るかど激談數刻に及びたれど、刀自は豫て期したる事とて些
かも動ぜず、罪なき其子を殺してまでも此家を乗取らんとし
給ふとも良人の留守を預かる中は、よしや此身を召さると
もこと一寸も動き難し、左ばかり其子の命欲しくば、いつ何時
にても参らせん、さりながら我もまた武士の妻なれば、我子の
敵やはか此場を見逃すべきと用意の懐劍逆手に取つて、隙や
あらんと身構へたり、一念凝つたる刀自の覺悟にさすがの敵
も膽を冷し、始めの擬勢何處へやら其儘後をも見ずして逃

せるこそ笑止なれ。

かゝる状態なりしかば、今は脅迫も腕力も叶ひがたく、義弟も暫時其儘になり居けるが、後人の中に立つありて家の件は穩かなる談判の下に母なる人に引渡す事となりしが、此間獨孤城を守る刀自は殆んど半年ばかりが程、三度の食を取れる事なく、大方握り食もて其飢を凌ぎ居しとなん。斯く櫛家に入りたる當初は、生計の困難實にいふばかりなく、それさへあるに腹黒き人の爲またなき苦みを受けしかど、屈せず撓まず初一念を貫きて、夫の爲遂に妖雲を拂ひしは、まことに女丈夫と稱へつべし。

斯る中に胎内なる小梅子の八ヶ月となりぬる頃、綽翁は開成

所の加藤弘之、神田孝平、田中芳翁等の爲に取立てられ、其所員となりて、旗本に進み、始めて祿百俵を賜はる事となりしより、生計いつしか一陽來復の状態を呈し來りしかば、刀自の喜悅また譬ふるにも、なく、漸う安心して、食事にも箸取る事の出來得るやうに至りぬとぞ。

その頃まで住家は下谷の立花邸前にありしが、熟談の末、其家は彼の母に引渡したれば、開成所への出仕を幸ひ一家を同所内へ引移し、爰に九年の長月日を送りたりき。斯て王政復古の當時は、綽翁もまた舊將軍に従ひて、静岡に移り、後沼津に住し、沼津兵學校の教授を勤めしが、其間は平穩無事にして、別に記すべき程の事もなし。夫妻は上來記せるが如き状態の中に千

辛萬苦を嘗めつゝ、子女の教育に力を盡しぬいてや少しくそ
の當時の模様を窺はむ。
綽翁が教育の大方針は粗衣粗食に甘んじ出来得るだけの儉
約をなし、其金もて子女の教育を充分にするの考へなりしか
ば、刀自も能く其意のある所を推し、素より貧苦の裡なれば、い
ふまでもなく針仕事は他家へ出さず、髪も自ら結びて其費用
を節し、小兒四人を相手に下女をも置かず、身に耐ふるだけを
悉く引受けて、甲斐々々しく立働きつゝ、夫をして毫も内顧の
虞なからしめ、家庭の教育は最も嚴格を極めぬ。
刀自が堅忍不拔の氣象に富めるは、今更いはんも管々しけれ
ど、爰に特筆すべき一事あり、开は彼の義弟に苦められたる頃

の事にて、嫁ぎて間もなく種々の無法を持込まれたれば、普通
の婦女子なりせばよしや難局に耐へ得るとも、必ず神佛を頼
むは火を見るよりも明かなるに、刀自は決してこゝに出でざ
りき。其謂ふ所によれば、邪は正に勝つ事能はざるは素より理
の當然なれば、唯此儘に何處までも推通さん、愚にもつかぬ念
佛の如きは、何の効もなかるべしとの決心なりき。斯て當時身
命を抛ち、良人と一家を守りたる苦みは、其後何人にも一言せ
し事だになかりしと、刀自が男恥かしき氣象は實に斯の如し
其教育法の如何に嚴格なりしかは想像するに難からざらむ。』
男の兄弟三人に悉く醫術を修めしめ、敢へて他の職を與へざ
りしは、全く綽翁の考案に出で、其蘭學に胚胎する處多く、斯る

亂世にありては何をか一の技術を持たざれば到底世に立つ事難かるべしとの考へより同じくは仁術とまで云はれたる醫術を以て其身を立てしめんとの見なりさといふ。以下先づ三人の男兄弟が教育の有様を語らんに嫡男故俣氏は十一歳まで開成所なる田中芳男翁の塾にありしが十六歳の五月より大學東校に入りて醫學研究に身を委ねつ卒業後程なく留學生に選拔されて獨逸に螢雪の苦學を積み斯て始めて我國へ精神病學を開くに至りぬ此間家は例の豊かならざりし程に幸子刀自は常に良人に計りけらく宜しく總領に全力を注ぎ將來次男以下の者が兄とし尊敬せんに充分の人物たらしむべく次では其以下の同胞に及ぼすべしとさてこ

そ俣氏の學資の如きは困苦の中に露些か惜しむ處なかりきとぞ。

明治五年沼津より京に出て、綽翁が海軍兵學校に教鞭を執れる頃は同翁が榮達の折なりけれど當時の儉約はまた類なく同僚の面々何れも手車に上等辨當の費を盡すが中に獨り絶えず握飯を腰に風の朝も雨の夜も常に徒歩にて通勤しつ、専心小兒の教育費をのみ造りぬかれば省内にては誰いふとなく握飯の榊とて寄ると觸ると其噂のみ高かりしとかや。』綽翁及び刀自の熱心已に斯る状態なりしかば、弟妹等が兄を敬ふ事幼少の頃より極めて厚く世間に往々ある兄弟喧嘩の如き一家に嘗て見たりし事なく互に友愛の念深く其睦じさ

譬へん方もなかりしかば、夫妻の喜悅大方ならざりけり。斯の如くして漸く育て上げたりし俶氏は多年の苦心其効ありて刀圭界に盛名を博せしが、一世の泰斗と仰がる事東の間や、去三十年中春猶寒き二月の六日情なき風は敢なく此俊見を誘ひ去りぬ。世に哀れ多きが中に子を先立てしばかり悲痛の極みはあらざれど、此時刀自は悲嘆を深く胸に秘め、女々しき涙一滴も零さずして語るらく、事ここらに及べるも天なり、命なり、千行の涙もまた亡兒を呼起す術のあるべしや、今更如何に嘆きても返らぬ事なり、幸ひにして未だ後に二人の弟あれば、一家断絶の憂慮はなからむとて、平然たりしは却つて深き哀れを覺ゆしと、知人の多くは今更の如く其氣丈なるを

稱へたりといふ。次男なる順二郎氏は始め醫師たるの志望なく、幼時より船の事のみ好みければ、早くも海軍軍人たらんと、父を抱き、父緯翁の頻りに兄と同様の業を修めしめんと、勸むるをも耳に入れず、遂に乞うて海軍造船學校に入りぬ。斯て三年ばかり爰にて苦學を爲しける程に、官制の改革に遇ひ止むなく退校せざるべからざるに至り、遂に志望を一轉し、延いて今の身分に及びたるものなりとぞ。末子保三郎氏は幼より暴れ者の間に、高き慈愛の姉故小梅子が一方ならず手塩にかけて、萬事其世話を爲したりしが、さしもの氏も嚴肅なる母刀自の一言には常に縮み上れりとぞ。今一例を舉れば、其高等學校にありける程

の事なりし、聞ゆる音楽好として、刀自には内々に、ヴァイオリン
一個を買求め、寄宿舎の徒然慰むる便とせしが、遂にはそれに
熱中して二度まで試験に不首尾の事ありしより、事早くも洩
れて散々の訓戒を受しが、其時の如き刀自は涙を流して熱心
に氏を戒めたりといへり。
男兄弟三人の教育は以上述べたるが如く、俊嚴なる刀自が感化
は能く萬難を排して、皆其業に成功せしめたるが、更に改めて
爰に其二女子の教育法を記すべし。元來男子の教育は家庭の
側もさる事ながら、其大部分は男親に俟つ事多く、これとは様
變りて女子のそれは、大方何れも家庭にあれば、これにぞ母の
全力は注がれぬべき。

醫學博士緒方正規氏の亡夫人小梅子は、彼の開成所時代に生
れ、刀自が家内の經營に非常の困苦を重ねし間に、人と成りけ
る事として、如何なる艱難にも耐へ得るやうにと養成せられぬ。
女史は性來非常に温順なる方とて、絶えて母の命に背かず、殊
に學校の成績いみじく中にも書に堪能の聞に高かりしが、刀
自は常に其家にある間、針仕事より炊事の末に至るまで、少し
も關ひなく習はせたりしかば、能書家にも似氣なく、冬季の如
きは手に胼の絶へたる事なかりしとぞ、斯て學校に女一般の
業を終へたる上、暫く附近の仕立屋に裁縫を習ひ、更に須田某
の塾に入りて女ながら論孟左傳等の漢籍を修められたれば、始
めて刀自が理想の淑女は造り上げられき。さて入つて緒方氏

の室となるに及び、良人が海外へ留學の中は里方に歸りて母への孝養怠りなかりしが、此間も刀自は命じて一回も髮結を呼ばせず、良人歸朝の曉を思ひて萬事節儉を旨とせしめ、何足はね事なき身上なれど、一日も遊び居るやうの事ありては、良人に對して濟まざるべしとて、手内職などさせて、只管貯蓄を勵ましめぬ。

二女とく子ぬしは、姉小梅子とは性質異なり、刀自が氣丈の處をのみ享けたれば、其教育方法も又これに應じ、姉と同一の小學に通はせけるものと、卒業後更に女子高等師範學校に入らしめぬ。其處への入學試験には二度まで不首尾の事ありにし、刀自の怒大方ならず、過たる事は詮なけれど、此次復も同じ結

果ならんには、直に下女奉公に出すべしとありしかば、流石勝氣なるとく子ぬしも甚く恐れて、それよりの勉勵日もこれ足らず、遂に優等もて同校を卒業するに至りぬ。刀自は年若うして清水家に人と成しかば、生れ付ての氣質に一層の嚴肅を加へ、常に其主義によりて子女の教育を務めぬ。されば老後の今日にありても、浮きたる業は大の嫌ひにて、家に三味の音を聞きたる事なく、正月とて未だ嘗て歌留多など催せし事もなし、已に七十四歳の老体ながら、老ひて益健やかに、今は三男保三郎氏の邸にあり、常に親類廻りを好みて、心樂しく餘生を送り居れりとなむ。

二 鳩 山 菊 子

(法學博士鳩山和夫氏の母)

鳩山博士が法曹界より政治界に渡りて、いみじき勢力を有する事、夫人春子ぬしが出て、何の會くれの會に有力の人たる事等は、今更新しく説く要なかるべきが、博士の生母は今猶健やかに音羽の邸内奥深く、安らかに其餘生を送り居るは、世人の多くは蓋し知るもの稀ならむ。
刀自名を菊子と呼び、年若うして和夫氏の父博房翁に嫁ぎぬ。鳩山家は舊勝山藩にて代々留守居役を勤めたる家柄なりしも、其頃の同家は不幸にして實子といふものなく、博房翁夫妻

は入つて其養子となれるものなりき。刀自の實家は藩主の分家なりしかば、小藩とは云へ素より裕福の生計とて、女一通の教育は萬事昔風に仕込まれ、業成るに及びて鳩山家へは興入しぬ。
性來順温なる方とて、妻となりてよりの刀自は、夫を尊ぶ事またなく、その言とあれば何とて従はざるはなき有様なりしかば、家庭の穩やかなりし事推して知るべく、いつしか二人が間に六人の兒を擧ぐるに至りぬ。さりながら中四人は不幸にして世を早うし、今猶健全なるは和夫氏と其兄小川盛重氏の二人のみ。
斯く多人數の兄弟の中、特に父博房翁が心を寄せ、未頼母しき

ものに思へりしはやがて其三男なりけり。此人幼時より群童の中に頭角を擢んで、學を好む事類ひなかりし程に、早くも神童の名遠近に高く、兩親の喜悅大方ならざりしが、天此俊兒に年を假さず、其十四五の折なりけん、情なくも雲深き邊に召し返しぬ。これより先兄二人には早く他家を嗣がしめければ、論なく此人をもて後嗣と爲すべかりし事とて、博房翁の落膽昏へんにものなく、外の見る目も哀れなりしとは、實に左もありなむ。

四男和夫氏は此時僅に十二才なりしが、端なく兄が斯る事になり、父の悲嘆言葉にも盡し難かりしを、小兒ながらも深く身にしみて、悲しく覺に、種々に父を慰めつと云ひけるやう、今更

さばかり嘆き給ふとも詮なき事なり。此上は己れ出來得ん限りの勉強を爲し、必らず兄上だけに成り終せん程に、少しく御心安められよと誓ひて、それよりの勉強常に衆に越えつ、大學を出て、後海外に多年の苦學を積み、斯て今の上には至りける。

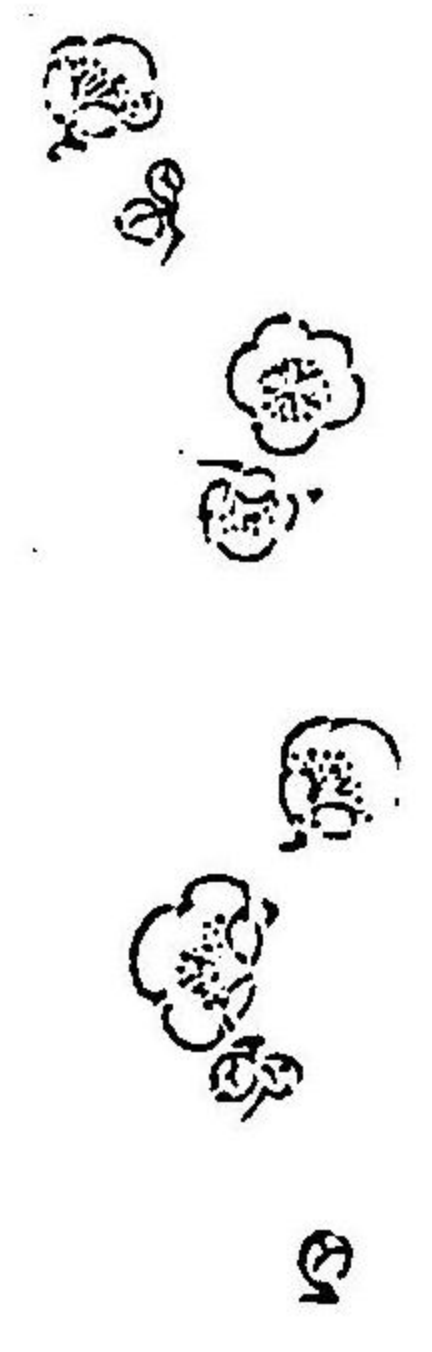
和夫氏が深く敬慕せる兄の早世に志を立て兼ては父の悲嘆を慰めんと、下心より刻苦勉強して遂に今日の身上に至りしは、まことにさる事ながら、一はまた菊子刀自の温順にして、つゆ夫の意に逆ふ事なく、何事も皆能く其言に従ひて、穩やかなる家庭を造り成し、結果に寄るは云はても明かなる處ならむ。

斯で博房翁は、和夫氏が米國に遊學の砌天命限りありて白玉樓中の人となりしが、凶報に接したる時の和夫氏の落膽は實に豫想の外に出でたりとぞ。并は氏の立志は全く亡き兄に代らんの上に出で、何事も父の爲に天晴有爲の人たらんと期せし事なれば、此報を得たりし折は一時全く失意の極に陥り、殆んど爲すべき術をも知らざりしが、又漸うに老いたる母の上を思ひ出でて、遂に故國に錦を飾るに至りしなり。

時に一番汽車にて立出る要あれば、音羽よりは何處の停車場へも程遠ければ、つとめて朝早く起出づるを常とすなるに、刀自は素より隱居の身上とて、斯る時何も特に早起の必要なきを、いつも同じき頃に起出でて、何くれとなく細事にまで注意するを常とすとか。餘事は兎もあれこれのみは年老いたる身の何かに心苦しければと、絶えず春子夫人の止むる處なれど、否とよ一家の主人が旅立ちするに、を送り出すは世の常にして、こは自分の務めと思ふ處なれば、心配は無用なりとて、些かも聞入れずと、世に有勝なる隱居氣質に引かへ、この心懸ありて、こゝろ始めて人の母たるに背かざるものなりと云ふべく、萬事が皆かゝる遣り方にて、今以つて一日も空しう遊び居

るやうの事なく、つい先頃も三枚重の紋付を自ら裁縫なした
る事もありしとかや。
年ころ老いたれ、百事皆かゝる状態なれば、その若かりし頃能
く一家を経営して内顧の憂なからしめたる功も推して知る
べく、素より家は代々裕福の方なりしかど、常に儉約といふ事
を旨としたりし程に、春子夫人が猶學校に教鞭を執り居りし
頃の如き、如何に多忙を極めし頃なりとも、刀自への手前夫の
衣服位は自ら裁縫せざれば叶はざる様なりき。
刀自の一面は斯る利かぬ氣を備へたれど、決して之れが爲昔
風の頑固一徹に陥らざるは、其温順なる氣質の絶えず之を助
くる故ならむ。されば和夫氏の勧めに従ひ、食物なども牛鳥肉

さては牛乳などを常に飲用し、専ら老体の滋養を務め居れ
り又、適度の運動をも忘るゝ事なく、孫を相手に庭園を逍遙し
さては、將基球突など見るを此上なき樂みとし、和氣霽々の裡
に餘生を暮し居れるが、特に庭園の逍遙につきてはこれ又和
夫氏より我は素より多忙なる身なればとて、豫て植木屋など
の監督を依頼されれば、時々の花物の培養さては、雑草驅除
の末に至るまで、大方ならず心にかけて、今はさながら其職務
の如くに思ひ居れりとなむ。



三 棚橋 絢子

(文學士棚橋一郎氏の母)

母 父 の 士 名

當今の教育界其人決して乏しからざれど、能く親子して同事業に盡力する者は稀ならむ。棚橋絢子刀自は實に此異例の人にして、身は女子教育界の大立物たり、其子息棚橋一郎氏は將多年一日の如く、我教育界に貢献せる處多きは已に何人も知れる處なるべし。
刀自は元大阪の人、酒商牛尾田莊右衛門翁の長女にして、七人の兄弟中やがて其總領娘なりけり。此牛尾田の姓につきてはいと面白き由緒あり、傳へて美談とするに足るべければ左に

(八二)

子 絢 橋 棚

其の由來を説かむに同家の祖先が其かみ北畠顯家公に仕へし頃の事なりとか、一日何處へか主君の御供しける時、其途次何れへか牛一頭何に驚きてか暴れに暴れて止むる者のあらばこそ、嗟呼といふ間に君の通路を妨げゝるに、祖先某は直に供廻りより立出で、暴牛の尾を捕ふるよと見る間に、大喝一聲さしもの大牛を目よりも高く差上て、傍の田中へ投込みつ、難なく君の通路を開きければ、御感斜めならずして、爰に牛尾田の姓を賜りしとなむ。
斯る由緒ある家に生れ來りし刀自の幼時は如何なりけん、甫めて五歳の折なりき、何れよりか隣家に移り來りし村山某といへる浪人を手習師匠と頼みて、只管稽古を勵みけるが、早く

(九二)

も師の見出す處となり、頗る出来よき兒なればとて、大方ならず心にかけて其面倒を見たりし程に、早くも其翌年には心學童話の如きを解するに至りぬ。斯て其十三歳の折なりし、父に就て女ながら専心經學を修め、たき由請ふ處ありしに、父は元來商人の事とて、百方其不心得を説き、如何にもして开を思ひ止まらしめんと務めけれど、刀自の決心頑として又動かすべからず、遂に其許可を得て、即ち父より經書の大意を受くる事となりき。幼時より斯る状態なりしかば、其七八歳の頃には已に看板に筆を染めたる事もあり、童話經學の感化の程も著く、孝行の譽れ極めて高かりしなり。

刀自は學問漸う進むに従ひ、身はいつしか學者たるの氣位も

出来たれば、酒屋の如き商家の後を嗣ぐ事、何となく厭はしく早くも他家へ出でんと、心さへ生ずるに至りぬ。さりとも決して女一般の仕事は打捨るとなしに、下女二人を相手に手廣き家の内何くれとなく母なる人の手助をのみ勤めける事とて、晝間は殆んど書讀む寸暇もなく、夜に入りての勤學常に怠る處なかりき。

斯りし程に、刀自の弟なる人、いつしか十二才にも成りければ、奥野松山の門に入れて勉學さする事となり、刀自をして其付添人たらしめぬ。刀自は二なき便宜を得てければ、其喜悅また醫へんにも、其塾に入りて、益す學を勵む事とはな

りにき。斯てこゝにある事、四五年にして、十九の春を迎へける

時、松山自ら媒介となりて日頃懇意なりし柵橋新五右衛門の子息大作翁に刀自を配せける。
柵橋家は代々二本松家の留守居役を勤め、祿三百石を食みしが、新五右衛門翁は刀自が嫁して程なく縁を離て浪々の身となり、兩刀を擲つて種々の事業に手を出せしが、兎角思ふ事は反對に損失のみ嵩みつゝ、殊には良人の弟に心善からざる人のありて、家の財産は見る間に其人の爲散々に亂費されたるさへありしに、刀自が豫て實父より讓受し地所をも、又實弟の爲によさやうにせられしかば、刀自も夫大作翁も俄に意外の困難を招くに至りぬ。
已に一家はかゝる状態に陥りしに不幸は猶これのみに止ま

らず、更に以外の點にも生じたりき、并は夫大作翁は少時より聞えし學問好なりしに、性來健全ならざりければ、いつしか視力を甚く損ねて、刀自が嫁したる時すら已に物の黑白も判かぬ有様なりしを、刀自は更なり實家の人々も松山翁もそを知るやうなかりけるに、此時始めて之を氣付きたる一事なりけり。
されば刀自が父翁の驚駭大方ならず、始めは松山翁に掛合ふ處ありしも、遂には直接柵橋家に至りて、娘取返しを談判を開きぬ。此時刀自は一部始終を聞きて、父翁に語るやう御驚は實にさる事ながら、何事も皆約束事として今更詮様なかるべく、今に及びて斯る事を申込まるゝは洵に忍びざる處なれば、此事

のみは何とか思ひ返されよと、百方言を盡して止まざりければ、翁も實にもと肯きて其方さへさる考へならば、何とて生木を引裂くを好むべき事こゝに出でたるも一は將來の不幸を思ふ心の闇ながら、天晴なるは其方の心、それこそ流石は我娘なれとて、遂に此事は沙汰止みとなりしが、これより刀自は一方ならぬ貧苦の中に、良人の役妻の役を繊弱き身一つに引受けて、具さに辛苦を嘗むる事となりしが、幼より聖賢の道に志せし程ありて、よしや如何なる變事ありとも情なく夫を見捨てざりし刀自の心事はさる事ながら、一は大作翁の人爲にまた偉大なる處ありて、能く刀自を感化したりし功も思はざるべからず。

刀自嫁してより未だ幾何ならずして、一家は非常なる困苦に陥りしかど、大作翁は根が學者氣質だけありて、毫も赤貧を苦にせず、思ひは絶えて貧富の上にあらで、只管詩文の道を楽しみつゝ、極めて宏量の人なりしが、一度明を失してよりは何事も皆一に刀自の經營に俟たざるべからざるに至りしも、毫も妻に下るべき様なく、刀自に何等かの缺點あれば常に遠慮なく其非を責めて散々に叱り懲らすを例とし、平常妻の爲に生計を立て居ればとの事より、心ならずも我慢を爲すやうの卑屈なる氣質なかりき。されども其常は甚く温順なる方にて、殆んど虫も殺さぬ有様なるが、其云ふ處一々理の當然に出で、絶えて夫たる威嚴を損ぜざりければ、刀自が畏敬の程大方なら

ザ斯る夫を持ちたりし事とて、刀自は嫁したる當初より内助に充分の力を注ぎて、夫をして後安からしめんと、決心なりしかど、不幸にして明を失せしより、さてこそ夫の内助を得て、自ら内外の衝に當り、子女の教育に種々の辛苦を積みたるなれ。

これより先舅新五右衛門翁の貧苦は一層甚しく、今は如何にも詮様なきに立至りしかば、一陽來復の頃までもと熟談の末、大作翁夫妻を岐阜なる親類へ預くる事となりしが、刀自も空しく人の厄介になり居らんも、心苦しければとて、爰に始めて、近隣の幼童を集めて、手習素讀の師匠をなし、何程かの報酬を得て、二人の口を糊する料とせしが、思へばこれぞ刀自が教

育事業に手を下し、始めなりける。

さもあれ、その収入とても極めて僅少の事なれば、猶一家をさへんには中々に難事なるより、夜は諸所の知己を頼み、針仕事をして爲して之を助け、其間を見ては書籍を讀みて、夫に聞かすを務めどしける程に、僅かの暇すらなかりしと、斯る程に一郎氏の生れてより、骨折の程も一層著るかりしかど、一度足手纏の出来てよりは、何かにつけて思ふ事心に任せず、素より餘裕とてあらざる上に、借財のみそれよりそれへと嵩み來て、今は首の廻しやうもなく、衣服は元より其他なくとも耐へ得る限りの品物は、一つ残らず賣却して、僅かの凌ぎをつくる悲境に沈みぬ。さもあれ斯る困苦の中にありても、夫が常に愛翫す

る書籍一切は絶えて手を付くるやうの事なかりしは、知人の
感嘆して止まざる處なりしとぞ。
恰も其折の事なりき。巽に刀自の實弟が刀自の地所を斷もな
くよきやうにしたりし事聞くとはなしに俠氣ある某の耳に
する處となり刀自の身上いたく氣の毒のものに思ひけん其
地所の買手に先頃の買價は餘りに安價に過ぐれば相場通り
に直して後金を刀自に渡してはとの事懇々談ずる處ありて
遂に六十圓を刀自に渡さす事となりしが刀自の嬉しさ如何
なりけむ只管某の好意を謝して早速件の金子を受けつ豫て
萬一の事もやと生母より恵まれたる金子などに合して、岐阜
なる家の落着をつけ名古屋に出でると同地の小學に教鞭を執

る身となりぬ。
その頃とて同じく學校よりの俸給のみにては、到底生計向に
も足るべきならねば、岐阜なる時と變りなく夜はいつもく
人仕事を勵みて、失明の良人を養ひ且つは子女の教育を事と
したりき斯くて彼處に日を経る程に、吉川泰次郎氏の一日大
作翁を訪ひ來りしが端なく縁となり、兎もあれ東京に出て
はどの事より刀自を師範學校に紹介して渡世の道をつけた
れば爰に意を決して丸善書店の社長を便り遙々出京して本
郷一丁目に小やかなる一家を構ふる事となりぬ。
斯りし中に學に忠實なる大作翁は福澤翁の塾に西洋の學を
聞さに通ふ事となり之を縁に刀自は翁の紹介を得て學習院

に教鞭を執り、其歸途小笠原岩倉の兩家へ出入して、令嬢達の稽古を爲すに至りければ、一家の經濟向も多少ゆるやかに成りぬ。
刀自が現今の育英事業は己に世人の知る處なるが、其始めは彼の岐阜の寄寓中にあり、轉じて名古屋より東京師範に入り、次て學習院に至れる間、世話を見たりし學生は、其數決して少ならず、少ならずるべく、刀自が教育の方針如何といふに、小兒に對しては、少時より決して嘘言を吐かしめざる事、忍耐力を養生する事の二點に力を盡し、斯て其根本より着々教養を爲すにあり、されば一郎氏の如き凡て此方針もて育てられ、殊には例の困苦の中に人となりければ、苦學の程も大方ならず、既に七八

歳の頃すら、時に二里三里の箇所までも使ひ走りに行かしためられたる事も屢々にて、小學校と名の付く所へ通ひしも、十二三才の頃漸う一年半ばかりなりき、其他は大方家にして、刀自が直接の薰陶を受け、斯くて予大學を卒ふるに至りしなり。
現時の刀自は何不自由なき身上ながら、猶ありし昔を忘るゝ事なく、今に此處彼處の學校に通勤して、専心女子教育の任に當り、又昨秋十一月より徳川義禮侯の囑に應じて、令嬢の教育掛となり、今は牛込市ヶ谷仲ノ町の同邸に寓す。其子女は一郎氏の外に女子二人あり、静枝子といへるは、現に三井銀行建築技師横川民輔氏の配として、貞操の譽れ夙に高く、姉なる某は大阪の辯護士種野廣道氏へ嫁したるも、不幸にして早世せり。

と刀自本年六十有五歳

四 坪井信良翁

(理學博士坪井正五郎氏の父)

上來掲げたる處は、何れも其母のみにして、各人それくの特
色はありながら、棚橋絢子刀自の如き異例は、取除き、大方内助
の側に立てる人のみなりしかば、其閱歴とて中には、彼是似合
へる處ありしも、是非なき事なり、斯てこゝに載せたるは、其父
なる人なれば、思ふに一層趣味ある物語の大に、異彩を放つも
のあらむ。

人類學者として、理學博士坪井正五郎氏の名は、現今何人も知

らざる者なかるべく、其養成者なる嚴父信良翁は、今年八十一
歳の高齡をもて、本郷西片町の正五郎氏邸にあり。

翁は越中高岡の人、文政六年八月を以て、同地の舊家婦人科專
門醫佐渡家に生れぬ。父は佐渡養順とて、代々養順の名を襲ひ
醫を業とする者なりしが、やがて其八世に當り、翁は其第三子
なりき。斯くて翁は幼より兩親の膝下に人となりしが、當時の
高岡は頗る繁盛の土地とて、商業の發達著かりけれど、學に志
すものとは至つて少なく、僅に醫師と僧侶とによりて、其命
脈を繋げるに過ぎず。斯る状態なりければ、翁は師として頼む
べき人なく、止なく兄より家に藏する書籍の素讀講義を受け
其他は同輩と共に互に詩文の道を講じて、順序も方針もなき

研究をなしたが、天保年間其十七歳の時なりき、一時人事不省に陥れるまでの大病に罹り、漸う快癒の後も兎角身体壯健ならずして、鬱々と日を送り居たりし程に、兩親の心痛一方ならず、兒が病を治せんには思ふに旅行に如くはなかるべしとて、翁を勸めて出入の藥商某に伴はしめ、始めて京の地より大阪附近を廻りしが、遂に京に止まりて爰に小石元瑞の門に入りぬ。

程なく小石氏の息中藏氏江戸より横文を修めて歸京し、其塾に大に洋學研究を鼓吹したるも、一日僅かに五六語より教へざりし事とて、翁は常に飽足らず、暇を見ては傍ら小森宗二、眞狩健次の二家に就て、其足らざる處を補ひつゝ、一日も勉學を

怠らざりき。其頃京の地は洋學漸く盛にして、研究者日に増し、數多くなり行けども、名だる者は僅々四五人に止まり、中に實力ありしは日野貞齋、新宮涼亭、小森宗二の三家なりき。斯る状態にて大方の修業者は、僅に横文二三十語をだに解すれば、出てく地方に門戸を張り直に先生を氣取る有様なりしかば、翁はそを見て憤慨大方ならず、常に時勢に反抗して一層洋學研究の念を強め、遂に東都に良師を求むる事となりき。

當時東都に洋學者として學識篤行共に並びなかりしは、深川の坪井信道翁にして、小石中藏氏の師事せしもやがて此人なりき。斯る縁故によりて、信良翁もまた其門に遊ぶ事となり、舊門生赤澤寛輔が再び東都に來遊するを幸ひ同伴して始めて

深川の塾に入りぬ。

その頃同家には塾生四十餘名あり新参の者四名は二名づゝ十五日間の交代にて當直をなす規定なりしが名にし負ふ著名の家をて病人薬取の出入常に絶えたる事なければ立關番の役は中々多忙にして到底讀書の折とてなければ後より新しき塾生の入來りて此交代の役に座はるまでは絶えて師に就て親しく教を受くる能はず殊に翁は小石氏の頼み赤澤氏の周旋にて漸く入門したる次第なれば容易に新入生の入來る望みなく殆ど一年ばかり此困難を續け居たりき。かくて漸く故參の身となり諸生と共に初めて教授を受くる事となりしも其書籍一切は各自手寫せざるを得ざる有様に

して就中字書の如きは前後二箇所の學舎にて隔日に見る規定とて一日一字を引くも容易ならざる次第なりければ篤學なる翁は人の眠る間も怠りなく一葉二葉と寫し行きて遂に字書の全部を寫了せりといふ。斯る苦學はいつしか師翁の見出す處となり翁は入つて同家の養子となるに至れり其後とても勉學の程は舊に倍し弘化二年には更に廣瀬旭莊翁の門に入つて漢籍を學び越えて翌年大坂に遊びて緒方洪菴の塾に入りぬ嘉永元年師翁逝去の後には内外百般の事皆一身に擔ひ食客婢僕等合せて十四五人の生計を立つる事となりければ其困苦大方ならず師翁の頃には陸尺四人して花やかに病家その他に立廻りしも翁の時

に及んでは僅に薬籠持一人を連れ行く様となりしが、其中松平越前守に召抱へられ、十人扶持を受くる事となり、一家大に安堵するに至りきとぞ。
後暫くにして蕃書取調所教授補に擧げられ二十人口俸を賜ひぬ。元治元年幕府の奥醫師となり家祿二百俵役料二百俵を受け、斯て慶應年間より明治の初年にかけては、徳川家に従ひ京坂の地より水戸静岡邊を經遊しつ、明治九年の頃まで重き官にありしが、五十四才の時高踏勇退して以後は専ら著述に従事し、斯て正五郎氏の教育を事としたりき。
正五郎氏は斯る間に生出てしが、生母は幼年の頃空しく他界の人となり、其後は繼母よの子刀自の手に養育せられぬ。氏に

は姉も妹も有りしが不幸にして長壽の者なかりしかば、氏は殆んど一人子同様のさまにて兩親の鍾愛雷ならざりき。されば其幼時は自ら温順にして、男兒に似氣なく外にての遊びは更なり、亂暴なる悪戯など絶てせし事なく、家の内の遊戯を常とし、其朋友の如き何れも女兒のみに限られしが、父翁は斯る間にありて、絶えず勉學を事としければ、猶頑是なき頃より氏もいつしかそれに感化せられて、朝夕筆執る事をのみ好むに至りしかば、兩親も又能く开を奨励したりき。
恰もろの頃の事なりとよ、翁が奉職せる静岡病院の傍に御薬園と稱するものあり、やがて今の植物園にて、至つて手廣き場所なりしかば、正五郎氏は其處を此上なき遊場とし、幼心にも

花木の數々を採集するを好み、時に種子を採りては我庭に蒔きて其培養を事とし、濕地に適するもの乾燥の地に適するものを考へては、小さき紙片に我發見などを書き記しつ、或は病院にて人体の解剖を目にしては、蛙を捉へて式の如き解剖を試み、其頃蛙の食道を早くも發見したりきとなむ。
翁夫妻は幼兒が斯る有様を見て、覺束なき其書散しの如きも決して疎末にせず、母刀自の一々并を綴て一冊の本とすれば、父翁は又其表紙を書きやりて草花畫譜などと名付つゝ、只管幼兒の張合になるやうしければ、氏は其六七才の頃より已に小さき著術家となりき。斯て三兒の魂百までの俚諺に洩す長じて大學にありける頃も常に斯る方面にのみ心を注ぎ、以

て今日に至れるは元より好める道なりとは云へ、幼時の教育の預つて偉大なる勢力を有するは又明かなる事實ならずや。』
已に大學を卒へて大学院にありける頃も、教員として地方に赴任する機無きにあらずしも、翁は此の如き事をなさしめず、只管氏の志願を全うせしめんものと、毫も生計向に心配させざりしも、世間一般の有様とは大に趣を異にせりと云ふべく、翁常に氏に語るやう、今は昔と事變り必ず其家の職を嗣ぐにも極らざれば、何なりと其好むに従つて學を勵むべし、さりながら祖父信道翁は身百姓より起りて能く一家を爲したる人なれば、此譽ある家名を一層擧ぐるやう常に心懸くべしと斯て萬事は氏の心の儘に打任して、大綱の外は毫も干渉する

事なく、其嗜好の道は蔭になり日向になり絶えず助長せしめ
つゝ、以て今日に至らしめしは能く人の父たる本分を盡せる
ものとや謂はむ。
猶此間常に弱き氏の身体を氣遣ひて、其世話絶えて至らざる
なく、能く内助の功を奏して、氏の成功を容易ならしめたる繼
母よの子刀自も、今なほ健全にして信良翁と共に静かに餘生
を樂しめり。

五 高橋白山翁

(法學博士高橋作衛氏の父)

信州高遠藩は近世相次て碩學鴻儒の數多輩出したる地にし

て、高橋白山翁も又其中の一人なり、其先考確齋翁はまた同藩
屈指の學者にして、翁は其薰陶に人となり、斯て藩の學統を嗣
ぎたるが、今の法學博士高橋作衛氏はやがて其子息なり。
翁が幼時藩の藏書は實に三萬卷の上に餘りぬと云へば當時
同地の學界が如何に隆盛を極めしかは推知するに難からざ
るべく、殊に翁の祖母さよ子刀自と云ひけるは女ながらも中
々の學者にて年十四の頃千代田城の奥深く御祐筆見習に上
りたる程の女性として男耻かしきばかりの氣質なりければ子
女の薰陶嚴格と云はんよりも、寧ろ酷に過ぎたる傾きさへあ
りて、幼兒の覺え悪しき時は容捨なく引捕へ、直に庭に投付る
といふ有様なりしかば、確齋翁も具さに辛苦を嘗めて人とな

り、やがて其教育法を白山翁の上にも行ひぬ。
斯る教育の下に成長したる翁は、早う十六才にして新徳館の
助教となり、已に三萬卷の書籍は悉く通讀したりきと云へば
其精力の程も驚くべく、家にありては徹宵詩文の研究に身を
委ねしかば、學力日に増し進境に越くと共に、いつしか大に身
体を弱むるに至りき。斯ては將來の志望も達し難しとて、爰に
武術の練習を思ひ立ち、廿五六の頃より頻りに擊劍を習ひし
が、元より利かぬ氣質とて、寒中にも百本稽古などといふを勵
みければ、技倆拔群にて藩主より賞を賜はりし事も屢々なり
しとか。

き頃となりけるが、翁は少時より山陽の著書を愛讀し居りし
が、上に、藤森天山の門に遊びたる縁もありしかば、いつしか感
化せられて勤王の大義を説くに至りぬ。さもあれ漸う薩長の
大藩是を主張するに及んでは、例の氣質の徒らに开を學べる
者と誤られん事を恐れて、俄に年來の持論を棄て、急に佐幕
論を唱道せしかば、遂に一藩の怒りに觸れ、特別の所置をもて
追放の憂目を見るに至りき。
翁が負けじ魂より心にもなき佐幕論を唱へ、一藩の大勢に是
非なく追放の憂目を見て、野口村に立退きたる當時の有様は
如何なりけむ。翁は妻女に作衛氏を負はせ、身は一包みの荷物
を手にして、馴れにし家居を立出し、時恰も慶應二年の饑饉

に際しければ、さらでも浪々の身の困苦一方ならず、僅に醫師と手習師匠をもて渡世としけるが程なく病家より白米二俵を禮にとて貰受しをもて、漸く飢を凌ぐのたづきとしたりき。斯て王政維新となりてよりは、振擡されて筑摩縣の師範學校教諭となり、専ら小學校創設の必要を説き、餘暇さへあれば縣下の諸所を巡回しつゝ、寺院等を借受けては到る處に學校設立の功を挙げ、る程に同地の教育事業は早くも全國に一二を誇るに至りぬとぞ。

其後とても常に育英事業をもて自ら任じ、新潟外國語學校の教諭より更に進んで自ら郡立中學校を設立して其長となりしが、明治十二三年の頃、早くも斯る僻村に中學校を造りしは稀

有の事業にして、今は其校同縣々立中學校となり居れり。斯て十八年には更に長野中學校の教諭となりしが、元より剛直なる氣質とて、同輩との意見合はず、遂に職を辭し、爾來門戸を閉ぢて再び世に出でず、只管詩文をもて餘生を樂しみ居れり。

翁が子息は作衛氏及雄二郎氏の二人なり。作衛氏には幼時より自ら漢學を仕込み、彼の祖先傳來の教育法を授けつ。十二才の時東京に出し、専ら勉學を勵ませしが、當時氏は大方ならず、數學を好み、後文科大學に入學せんとの心算なりしも、中途方向を轉じて俄に法學を修むるに至りぬ。次男雄二郎氏に對しては、翁は全く放任主義を取り、其工學を修めしめしも全く本人の意に任し、とまでなりと。

翁の配乃ち作衛氏兄弟の母刀自は翁とは全く正反對の氣質にして温順常に夫の勤癖を撓めつゝ能く子息の教育を助けぬ作衛氏が幼時の如きは家に數多の塾生ありて中には心好からぬ者もありけれど絶えて其惡風になすまざる様したりしは一に母刀自内助の功なりしが今は世に亡き人の數に入りぬ翁は六十八歳の高齢もて今猶健康壯時に異ならず翁が教育事業に従事せるは去卅年まで實に四十七年間の長きに及べり其門生又三千人の多きに達し俊秀も少からず現に工學博士近藤虎五郎氏等は何れも贊を翁に執りしものなりきといふ。

六 德富一敬翁

(國民新聞社長德富猪一郎氏の父)

德富蘇峯氏が操艇者としての聲名は既に何人も知る處其弟蘆花氏が穩健なる家庭小説を標榜として近時小説壇に一幟旗を翻せるも又等しく世人の知れる處なり此兄弟の父母は共に今尙健全にして逗子なる別邸青松白砂の間に遠く世塵を避けて安らかに自然を樂しみ居れり父は一敬翁母は久子刀自とて翁は今年八十二歳刀自は七十五歳の高齢なれば今春東宮殿下の同地に御滞在あらせられし砌土地なり古老七十を越えたる限りへそれ〴〵有難き下賜の御沙汰ありける

に、翁夫妻も打揃うて此恩典に浴せしが、蓋しまたなき名譽な
らむ。

翁は元熊本の豪士所謂一兩一疋とて具足一兩馬一疋の家に
して熊本を去る南方廿五里鹿兒島との境に住しぬ。同地は肥
薩の要路に當り、兩國を往來する者必らず其處を通るべき事
となり居たれば、昔時より同家には名士の宿泊せる者數多く
近くは高山彦九郎頼山陽の如き滞在したる事もあり、幕末の
頃には陸奥伯の如き來つて幕吏の逮捕を免がれたる事もあ
りしと、かゝる如何に土地の有力家なりしかは、推知するに難
からざるべし。

く成るに及び、久子刀自を娶りて二男五女を擧げぬ。末二人は
やがて男子にして猪一郎氏は實に其第六子に當れり。始め五
人は引續きて何れも女子のみなりしかば、猪一郎氏が出生は
實に一家に一道の光明を與へたるが如き觀ありて、翁の喜悅
大方ならず、一日も早く物の役に立てんと志堅く、幼時にあ
りては母刀自の常に傍に置きて、四書五經等の素讀を授け、時
に三國史太平記等の稗史をも讀ませ、は、只管趣味の發育を
務めぬ。斯て其十一二歳の頃より、翁自ら新策通義等の講義を
授くるに至りしが、幼より殆んど讀書責の如き狀とて、猪一郎
氏の學問は日に進境に趣き、十二三歳の頃は其心已に大人の
如く群童の獨樂廻し竹馬等は、氏の全く度外に見たりし處な

りき。これ併しながら一敬翁の日暮れて道遠しとの謂に鑑み
 愛兒の教育片時も念頭を去らざりしに依れるならむ。
 其後氏の出て同地の私塾にあるや、さすがは未だ思想も定ま
 らざる少年の事として、時に家なる父母を思うては、私に塾を抜
 け出て立歸る事も風々なりしが、久子刀自は常に翁の心を受
 け、何時もく、氏を門より内に入れずして、絶えず其心を勵ま
 し、其頃翁は縣の政治に關係して、少時も餘暇なかりし程
 に、母刀自の丹精は實に一方ならざりけり。
 猪一郎氏の少時は斯の如くにして、教育せられ、明治九年はじ
 めて東京に出てしが、程なく京都に入りて、同地の同志社に勉
 學する身となりぬ。斯て十三年の末一旦故郷へ歸り、十四年の

頃父翁と共に縣下大江村に大江義塾と云へるを設立し、翁は
 漢學氏は英學を受持ち、十九年に至る六年間、數多の門生を養
 成せしが、同年の末一家を擧げて再び東京に出てぬ。斯て今
 國民新聞は實に其翌年創刊せられたるなり。
 かゝる程に翁夫妻は老体の事なればとて、逗子なる別邸に遠
 く世塵を避くる身となりしが、夫婦の間美しきは、其年若かり
 し頃より老年の今日に至るまで常に變りなければ、斯る夫婦
 は世に多く例を見ずとて、知人の限絶えず稱賛措かざる處な
 りとぞ。
 殊に久子刀自は自ら發起となりて、婦人同志の老人會と云へ
 るを組織し、時に此處彼處に打寄りて、風流韻事に餘生を樂め

るが、其主意とする處は、老人共の常に一家にありて、別に忙しき用事とてなきまゝ、遂には嫁の邪魔を爲すやうに至るは口惜しき極みなりとて、さてこそ彼の會を發起せるものなりと云へり、刀自は猶敷島の道にも分入りて、堪能の聞え高く、一敬翁の詩文に精練の譽芳しきは、小楠翁の薰陶に人となりたる事なれば、今更事新しく喋々するの要なけむ。去二十四年九月翁七十歳の誕辰に際し、年來の吟詠を編纂したる淇水詩艸一編は、常に同人間に愛誦せらるゝ處なりといふ。

七 川村湯香子

(伯爵川村純義氏の母)

迪宮淳宮兩皇孫殿下の御養育係として、世に時めく樞密顧問官海軍中將伯爵川村純義氏には、今尙母刀自あり、名を湯香子と呼びて、今年八十有六歳の高齢なり。元來同氏の家は鹿兒島藩中さのみ下りたる家柄ならで、殆んど第二流に位したれば、従つて生計の程も先づ豊かなる方なりしが、宿世いかなる因縁かありけん、實子といふ限は代々女子のみにして、純義氏が生れしまでは、男子は未だ嘗て同家には授からざりしなり。

されば湯香子刀自も家付きの娘なる事論なく、まだ幼かりし頃早う父母に死別れ世にも憐なる孤兒となりしが、此頃家運漸く傾きて、生計の上も思ふに任せぬ状態となりけるより、母なる人は刀自を今の島津男爵家に預けて、遂に他家へ嫁ぎたりき。斯て刀自は十八九の頃まで、男爵家の懸人となりて、絶へず懇切なる教育を受けしが、早くも良縁ありてふさはしき婿を迎へ爰に川村家を再興する事とはなりぬ。さもあれ家運の衰退は前に述べたる如くなりしかば、夫は何どかして同家を昔に劣らぬやう爲さんものと遂に刀自に計りて琉球國へ押渡り、百万方殖産の道を計りけるが、彼處に止まる事前後數年が間家なる刀自は内外の雜事をなべて弱き身一つに引受けて

具さに辛苦を嘗めたりき。さる程に夫の歸國してより間もなく刀自は出産しけるが、代々の女子のみに引換へて珍らしくも玉の如き男兒生れ出ぬ。これぞ今の伯爵にして不思議の例なりける程に、刀自等の喜悅比ぶるにもなく、幼兒の養育殊の外心を注ぎて最も嚴格なる教育を施しき。純義氏は斯る間に人となりて、年二十歳の頃父翁と共に江戸に上りしが、其歸國の途次父は俄かに發病して氏が心を込めての看護も甲斐なく、船の伊豫松山を過ぐる頃遂に歸らぬ人となりける。純義氏の悲嘆實に大方ならず、如何にして母に顔を合さんと只管打萎れてのみありける中に、船の規定の餘

儀なくも遺骸は水葬と事定まりしが、氏は頻りに船長に訴へて、漸くそののみ思ひ止まらせ、かくて松山に假葬を濟せつ、悄然として故郷に歸りぬ。父子の便り如何にと待詫びし刀自の嘆きは如何なりけん、心中必ずや云ふべからざるものありしならんも、我兒に落膽させじと涙を隠しいたく氏を勵まし、は正に女丈夫の例に洩れずと謂ふべし。斯る程に世は王政維新の始となり、純義氏は起て郷黨と共に百方國家の大事に粉骨碎身せし功著かりければ、忽ち一布衣より身は華族に列し、永く皇室の藩屏たる榮を見るに至りぬ。されば刀自もありし昔に引かへて、今は何不自由なき伯爵家の樂隱居、世の憂節は外にしていと安らけく餘生を樂しむ身

上ながら猶常に昔時の状態を忘るゝ事なく、其居間の如き何時も六疊の狭き座敷を撰びて足れりとし、家人の今少し廣き場所を勧むるあれば、否とよ其以前を思へば、これすら猶過ぎたるやう覺ゆるものをとて、決してそれより上を求むる事なしとどか。此心懸は單に其居間のみならず、萬事が萬事何れも此有様にして、未だに僅かの間も絶えて針を離しゝ事なく、殊には節約を旨とし、神佛を信仰する事極めて深く、時に小説などを手にしては無聊を慰むる便とせり。伯爵家は今こそ皇孫殿下の御養育係として、榮華並びなき家にはあれ前にも記せる如く、一家再興を爲したる頃の状態は、

赤貧あかひんながら洗せんふが如ごとくなりしが、刀自たみは斯かる間あひだにありて、千辛せんじん萬苦ばんくを事ことともせず能よく夫をととを助たすけ子息しそくを勵ほげまし、能よく現時げんじの榮達えいとうを見るに至いたらしめし人ひとほどありて、人への思おもひ遣やり並々ならず、多おほくの召使めしつかひへの行届ゆきとどいづも至いたらぬ限かぎもなければ、同家どうけに仕つかふる男女なんぢよに絶たえて不平ふへいを抱いだく者ものなく、例たとへば芝居しばなどへ行ゆきたる時とき、其日そのひ共に連つれざる女中にやちゆうへは、必かならずふさはしき土産みやげを持歸もちかへるを常つねとするが如ごとき様さまとて、數かずある女中にやちゆうの中には、よしや口くちさがなき蠶さかありとも、刀自たみの嚼うばは嘗かつて其蔭言そのかげごとにも乘のりたる事ことなしとは、實じつに左ひだりもあるべき事ことならむ、刀自たみは又また一方ひといたく嚴格げんげつなる性質せいしやうとて、今いま以もつて盛夏せいげの中なかも絶たえて晝寢ひるねなどしたる事ことなく、此この五六年ごねん前まへまでは日々ひび下女げなを相あ

手てに立働たちたき居ゐりしと云いへるが、これはた昔時せきじを忘わすれざる一例いちれいなるべし。

斯かて純義じゆんぎ氏の兩皇孫りやうかうそん殿下てんかの御養育ごやういく係けいとなりてよりは、一家いけの名譽めいよ此上このかみなしとて、刀自たみの喜悅きいつ醫いふるものなく、兩殿下りやうてんかの唯何たひな事こともなう御健壯ごけんさうに、美うつくしう御成長ごせいちやうまします事ことをのみ祈いのり参まゐらせ居ゐれりとなむ。

八 二見きん子

(大阪西成製紙會社社長二見昇氏等の母)

三人さんにんの同胞どうぱう長ちやうを二見昇にみのぼる氏しと云いひ大阪西成製紙會社おほさかせいせいしやくわいしやくの社長しやちやうたり、次つぎを工學博士こうがくはくし二見鏡三郎にみきやうざう氏しと云いひ現げんに京都帝國大學きやうとていこくたいく理工りこう

科教授たり、三を工學博士甲賀宜政氏と云ひ大阪造幣局試金課長たり、斯る名譽ある三子を育てたる母を誰とかなす、二見きん子刀自こそ、實に其人なりけれ。
刀自は天保三年七月十五日に生れ、江戸大名小路松平和泉守の藩士宇野伊左衛門翁の三女なり、素より小身の事とて、文筆の教など、さして深くは究めず、且つは、十三歳の時父を失ひ、兄の手に育てられしより、猶更教訓を得る道なく、十八歳の御江戸駒込太田備中守今の太田子爵の藩士二見五郎左衛門翁に嫁し、内助の任に當りぬ。
其頃二見家は、先公太田道順のお納戸御膳番役を勤め、祿五十石を食み居たることとて、家資も饒ならざりしかど、極めて清

廉の質ゆる毫も卑劣の念なく、深く自營の要を知り、其頃同藩某氏特有の業たる將棋製造の株を買ひ取りて、之を市中の商店に頒ち、相應の價を得て、家資を肥し、刀自は閑暇を偷て、他人仕事に聊かの資を得つゝ、夫妻ともく、艱苦に甘んじ、斯くて、詮之助今の昇氏鏡三郎貴知郎今の宜政氏四郎人の四男を設け、質素の生活を爲したりしが、其間には火災の爲全家焼失の悲みあり、夫は年來の痔疾にて、多く病床に臥し居りしが、刀自は一方ならず心を盡して、其看護と家道の興隆とを謀り、四人の小兒を育つるにも、二三年が程は下女も置きたれど、其後は一人の僕婢も雇はず、夫とて、薬餌不便の時なれば、看護も容易ならぬを、些しも苦にせず、真心を籠めて看護せしかば、藩中の

評判者どまで呼ばるゝに至れり。されど斯る艱苦は、やがて刀自が不撓の精神を養ふ因となりて、見事三子を養成し得たりしが、程なく明治維新の騷擾となり戊辰の夏五月一日各藩士は一旦歸國を命ぜられたれば、二見氏も四子を伴ひ遠州掛川に移りしが、途中大井川の氾濫等にて、意外の困難を嘗めたる後僅に本國に着し大目付の役を承くる間もなく再び轉地を命ぜられ、家財を纏めて藩主に隨ひ更に上總松尾に移りぬ、時に明治二年三月なりき。其頃上總の松尾は、人烟稀薄の僻地とて太田家さへ新に土地を均し邸宅を構ふる始末なれば、其間に於ける刀自の苦心は大方ならず、されど雄々しき刀自のことゆゑ、毫も撓むことな

く家政を整へ、時には茶畑を作り、時には蠶を飼ひ、または椀取りて機を織り、甚しきは自家に用ふる米まで自ら杵を取りて搗きたる例さへあり、麻をうみ糸を繰り、豚を畜ひ、九禽鳥など飼ひて少からぬ収入を得、身は士族の斑にありながら、殆んど貧しき農夫の行ひまでして厭はざりしは、刀自の慧眼夙に夫の病軀にて壽永からざるを知り、童兒も多ければ、其養育に苦まんことを慮りての上なりけり。明治三年の頃とか、太田藩にては洋學研究の爲め、教師二名を聘して、藩中の青年を學問所に入らしめしが、鏡三郎氏は特に撰ばれて生徒となり、昇氏は是より先慶應義塾に入りて勉學し、宜政四郎人の二氏亦漸く研學の途に上りぬ、當時世況未だ

定まらず、斬髮の令さへ容易に行はれざりしに、嗚然愛子をして上京研學せしむる刀自の達識こそ貴かりしか。斯くて同じき六年夫は年來の病氣重りて遂に逝去せしかば、刀自は、悲嘆の涙に暮れながらも、甲斐々々しく遺産を處理し、些少の公債を便りに、兒等を教養し、且つ昇氏は、其頃義塾を去りて、横濱亞米一に通譯の職を勤め、月々の給料を割きて、刀自が許に贈り越す事となりたれば、それこれにて、學資を作り、刀自も少からぬ勞苦を経つ、明治九年末子四郎人氏の東京に引續きて、上京し、鏡三郎氏は大學校に入らしめ、宜政氏は一且甲賀源吾氏の養子として遣はしたれど、源吾氏戊辰の役宮古港にて戰死の後再び刀自の下に在りたれば、之をも開成學校に

四郎人氏は中村正直氏の同人社より轉じて外國語學校に入學せしめて、各々専門の學を修めしめ、自らは、淺草下谷邊の寺院に假寓して、ほの暗き洋燈の下に、車夫の用ふる笠の覆布を縫ひ、又は鼻緒の眞などを縫ひて手内職とし、只管我子の成學を樂しみぬ。刀自の斯かる辛苦は、深く愛子の精神を刺撃しけん、昇氏は、幾許かの資を諸弟に送りたる上、時に洋服其他の用具など心掛けて贈り越し、諸弟も亦學校にての成績頗る良好にて、鏡三郎宜政の両氏は共に官費生となり、四郎人氏は醫學に志して、着々進歩の迹を示し、明治十二年には鏡三郎氏は大學を出で、宜政氏も之に亞いて業を卒へ、鏡三郎氏は參謀本部に宜政氏は造

幣局に各々奉職したりしが、刀自は猶ほ儉素を守りて、寺院に
 假寓し鏡三郎氏が迎妻のことあるに及びて、初めて同じ家に
 樂しく暮す事となりき。
 されど此の艱苦多き刀自には不幸猶は去りやらず程なく鏡
 三郎氏の令閨は、二女を遺して永眠したりければ、刀自は再び
 幼兒の養育に身心を碎き、日々神田の住居を出て、小川町九
 段の邊まで愛孫を背負ひ歩き、は乳母の務めをなしたると
 幾度と云ふ數を知らず、或夜の事と駿河臺の邊にて、老軀の
 歩を誤まり打頓びて、數十日の間接骨醫に通へる事さへあり
 き、鏡三郎氏外遊の後、昇宜政兩氏の方にありて、猶ほ孫女の
 養育を怠らず、後また京阪の地の住み難きに困じ、且つは家庭

の平和を冀ひて東京に歸り、來馬立道氏方に寄寓して、信佛の
 誠を盡し、二子よりの養育金に依り、始めて安樂の日を送ると
 となり、後鏡三郎、宜政の二氏同時に博士の月桂冠を受け、昇氏
 も、西成製紙會社を興して、今は三子俱に榮位にあれど、悲しい
 哉、四郎人氏は、明治十五年虎疫に罹り、學半途にて長逝し、自刀
 が永への涙の因となりぬ。
 刀自性來仁慈の志厚く、他の困苦を見ては身を苦めても救は
 んとを思ひ、故舊の爲に財を費し、心を勞せしと少からず、來馬
 立道氏が一子、今の佛教社主幹來馬琢道氏を得て、其母なきに
 困むを見るや、殆んど我子の如くに之を教養し、立道氏逝去の
 後、其遺囑に依りて、今猶ほ監督の任に當り、つゆ壓く所なき

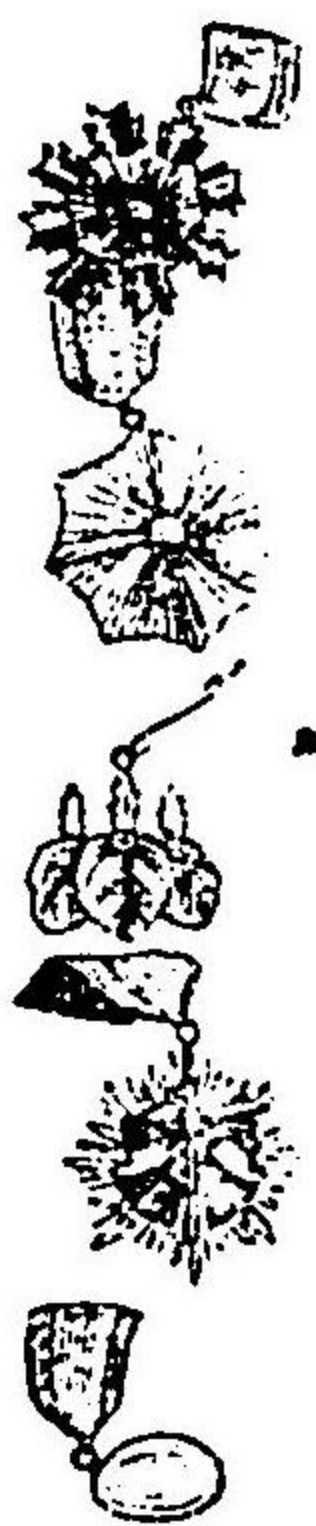
が如きはた自刀の姉君が種々の不幸に遭ひて生計饒かならざるを見ては自ら我側に引取りて之を養ひ別居せし後も月々少からぬ費用を送るなど世にも稀れなる行ひとて孰れも喜び合へりとなむ。

刀自また神佛を信ずる念深く毎朝佛前に勤行するは勿論常に念佛の聲を絶たず晴天の折には社寺に参詣して子孫の繁昌を祈り各縁族の墓に参りて菩提を吊ふに餘念なく昨年四月には、珠道氏を伴ひて越前永平寺に参拜し又上總の故土に近親の墓を掃ふなど老躰に似氣なき振舞なりと謂ふべし。

されど刀自の雄々しき心は此の安樂の時にも未だ磨損せず常に人力車に乗るを好まざれば一日に數里を歩むこと珍ら

しからず又裁縫を好みて自用の衣服は大抵自ら手掛けざるなく其根氣よきこと壯者を凌ぐばかり若し下婢などの洒掃宜しきを得ざれば敢て之を責めず直に自ら箕箒を取りて之を補ひ毫も厭ふ色なしとかや。

刀自の一生は誠に涙の一生なりされど老後の樂みは蓋し壯時に植ゑたる種の實りしもの歟良人が臨終の折私に苦勞したざりて先きへ往くがお前は之から樂が出来るぞの一言は當時の辛酸を想ふ刀自が唯一の紀念なりとぞ。



九 小金井幸子

(醫學博士小金井良精氏の母)

小金井博士が刀圭界に於ける聲名は夙に高く、其室喜美子夫人が閨秀作家として明治文壇に流麗なる才筆を揮へるも、既に世人の弘く熟知する處たり。博士が母刀自幸子ぬしは、今猶ほ健康若かりし頃に異ならず、然かも閱歷中最も辛苦を重ねたる人なりとす。

小金井家は越後長岡の藩にして其遠祖は三河に出て、中頃徳川十七將の一たる牧野成定に仕以祿二百石を食みしが、傳へて良精氏の先考儀兵衛翁に至り、寺社奉行町奉行郡奉行勘定

頭等を勤めぬ幸子刀自は實に其配たりき。實家は同藩小林氏父は又兵衛とて文武兼備の聞え高く、加ふるに兄虎三郎は佐久間象山の門下にて、吉田松陰と並び稱されたる人なりしかば、刀自も又其流を汲んで夙に賢徳あり、儀兵衛翁の許に嫁してよりも内助の功著く程なく六人の子女を挙げぬ。良精氏は其次男なり。

斯る中に世は漸う騒がしく、慶應四年大事端なく鳥羽伏見の戦鬪より破るゝや、次で東北征討の大命下り、昨日の將軍遂に朝敵と目さるゝに至りぬ。是に於てか東北の諸藩悉く一致協力して薩長諸藩の軍と兵を交ふる事となりしが、當時長岡藩には雄將河井繼之助あり、兵を卒ゐて其長となり、屢々官軍の

鋭鋒を挫き驍名大に北越の地に振ひしが、日に増し勢威赫々たる官軍には敵すべくもあらで、さしもに堅固なりし長岡城も敢なく敵の陥るゝ處となりぬ。此時儀兵衛翁は藩主を護りて外にありしが、刀自は子女を携へて難を城外の僻境椽堀村に避け嘗て大方ならず世話したる村人某の家に入りぬ。さもあれ繼之助は再び盛返して、到る處に敵を惱まし、長岡城の恢復を圖りければ、諸所の小戦寸時も止む間なく、城外又危険の虞あるに至りしかば、刀自等は止むなく其隱家を忍出で更に守門山の麓に遁れ、林間の藁小屋にありて偶かに雨露を凌ぐの惨境に陥りしが、城頭の戦鬪日を追うて激烈を極め、砲聲火光日夜耳目を掠めければ、果は山中の露宿も夢結び難き

事數日に及びぬ。然も刀自は毅然として毫も愁情なく、諄々子女を訓へて、非常の場合に處する覺悟を説く事常と異らざりき。恰も其折の事なりけり、良精氏の兄權三郎氏は其頃僅に十一歳なりしが、一日谿流に出で、食器を洗ひ過つて箸を失ひしかど、元よりさして意に留むべき事にもあらねば、歸つて其由何氣なく刀自に語りぬ。其時刀自は子女三人を膝下に招き襟を正うして語るやう、今更其方の過失を責むるにあらねど、こは小事に似て決して小事と云ふべくもあらず、昔時平氏の一族遁れて五家の山奥にありける頃何ならぬ器物を水に流してゆくりなく敵に在所を知られたる例もあり、斯くて我等の

難を此地に避くるも敵は既に近く此下流にあれば彼の箸流
れて不幸にも其手に落ちなば五家の山の故事は目の前大事
といふは此事のみ御身等なほ如何に幼しとも弓矢執る家に
人となり他日君家に盡さんと思ふ志あらば斯る事だに夢さ
ら疎忽に爲ぬものぞと繰返し論しけるとぞ斯る混乱の
間にありて其兒を思ふの切なる餘さまでの事まで能く心を
止めたる刀自の用意は實に驚歎の外なからずや。
當時繼之助の驍勇は其比なく頻に敗卒を勵まして程なく長
岡城を恢復しけるが大厦の倒れんとする時一木の以て支へ
がたき譬にもれず加ふるに王師の勢威日に熾にして城乗取
も束の間や日ならずして城は再び官軍の有に歸し繼之助も

遂に潔よき最期を遂げぬ勢己に斯の如くなれば流石雄藩の
聞こえ高かりし長岡藩も今は散々に蹂躪せられ味方は身を
置く處もなかりき是に於てか刀自は更に山中の隱家を後に
して會津に走り暫く其處に落着きしが間もなく其處も兵火
の巷となりしより再び出でて米澤に遁れ轉じて仙臺に趣く
に至りぬ其間の困苦は實に名狀すべからざるものありしが
刀自は常に子女を勵まして訓戒甚だ務めたりき。
斯て兵亂鎮定後儀兵衛翁は藩の少參事に任せられ昔に變ら
ぬ築達を見んとせしが盟友河井繼之助の已に彼の世の人た
る上は要なき祿を食らんも心ならずとて早くも致仕したり
しが重ねくの不幸さへ打續きしが上に翁は病の爲に一身

思ふが儘ならず、これより一家の經營は一に權三郎氏の手腕に俟つ事とはなりぬ。良精氏が苦學は皆長兄が資を助くる處たりき。

一度君家の没落に當り、頼みに思ふ夫には暫時も身を寄する術もなく、唯子女三人に事無からしめんと、或は野に寝ね山に伏し、落人の身の悲さは風の音にも心を止めて、幾百里の他郷へさすらひけん、刀自が當時の辛勞果して如何なりし乎。然も刀自は流石に武家の配たるに恥ぢず、斯る間にありても從容迫らず、心中自ら餘裕の存するありき。

すみ棄て、出行く庭に打塵き、誰まねくらむ青柳の糸、夏草の繁み、が中に交りても、色なつかしき撫子のはな

かきくらし袖に涙のふる里はそなたとばかり打眺めつゝ、此秋はわきて露けし月見れば、いつも悲しき習ひなれども、丸木舟よるべの岸に風たちて、漂ふ末やいつこなるらむ逢見ては、嬉し悲しも忘られて、先さしぐむは涙なりけり。等の數首は皆當時事につけ折にふれての吟詠にて、斯る場合にありても、猶嗜好の道を忘れざりし、刀自の心の中こそ床しけれ。

一〇 村田直景翁

(畫家村田丹陵氏の父)

五六年以來、根岸向島のあたり、遠く世塵を避くる雅人の間に、

探墓會掃苔會など云ふもの組織せられ世に埋れたる古名家の墓所を明にするを旨とせしが好事家の數少なからざる中に村田直景翁の名は夙に世上に喧傳しぬ翁は當今歴史畫に名高き青年畫伯村田丹陵氏の父にして今は閑散の身上なれば常に好んで斯る事に心を潜むるなりといふ。翁は世に寛政の三藏として知られたる清水俊藏の孫に當り俊藏の長子正巡はやがて翁の生父なりとす(俗に寛政の三藏として聞えたるは近藏重藏平山行藏間宮林藏の三人なり事は栗本鋤雲翁の砲菴十種によりて傳へられしが間宮を其一人として數へしは全く鋤雲翁のうる覺えにて正しくは清水俊藏なる事確固たる証跡ありとぞ俊藏には四男ありて長子

正巡の外に二男は正則とて槍術を能くし遂に一家を立てぬ。三男なる正順こそ世に知られたる大橋訥菴にして幕末の儒者として天下其名を知らざる者なし。四男正春は又文武兩道に達し田安家に仕へたりき。斯る祖父かゝる伯父を持つる直景翁は正巡の第二子として天保十一年十一月世に生れぬ廉窩と號し又一に三鼠道人と號す豫て祖父と父との薰陶に人となりしかば早う文武二道に精通の譽高く殊に書に堪能の聞ありしが年廿歳の時叔母なる人の嫁ぎし家を繼ぎて村田氏を冒すに至りき。翁の教育の主なる處は大方之を父に受けしが學問は叔父訥菴より得たりし處極めて多かりき由來祖父は長沼流の兵學

を以て家を成したる人なりければ、生父も翁も同様兵學を講じて文武兩道に渡り普通の學者とは其撰を異にせり。當時田安慶頼侯夙に學事に志深く常に天下篤學の士を招きけるが翁の叔父正春は嘉永三年召されて同藩に學校を開き、大に長沼流の兵學を講じたりしが、安政年間不幸正春は逝去せしかば、侯の落膽大方ならず、此儘廢校せんも口惜しきに、其後繼誰にか命ずべきと種々詮議する處ありしが、其頃翁の長兄正毅は僅に廿五の若年なりしも、特に召されて叔父の職を嗣ぎ、翁は其の縁にて兄を助くる事となりぬ。幾何もなく世は刈菰と亂れ來て、徳川の清き流も波風驟立ち勤王討幕の聲四海に反響して、形勢忽ち一變し、將軍慶喜公大

政を奉還なし、江戸は東京と改まり、國家に勳勞ある者は勿論草莽浮浪の處士までも、夫れ々々朝廷に登庸せられ、一たびは錦旗に對し、無禮の舉動ありし者さへ、罪科を宥められて其材識に隨ひ、拔擢を蒙むりしかば、諸藩の士人は我先にと東京に馳せ集まり、青雲の梯に攀ぢ登らんと奔競せる中に、直景翁は滄桑の變に、太く感ずる所やありけん、堅く門を鎖して物外に超脱せり。然るに祖父以來、交り深き人々は何れも朝廷に奉仕して、明治の聖代を謳歌せるが、其頃直景翁の齡未だ不惑にも至らず、可惜才能を懷きて、閑散の地に在るより、交も仕官を勸めぬ中にも、頼山陽の嗣子頼支峯氏(其頃大學の中博士)は、翁の伯父訥菴に恩を承けたることあるを以て、頻りに勸誘を試み

身は岩倉右府の眷遇を蒙り居るを幸ひ翁を右府に推舉せんとて懇ろに其旨を傳へたるに翁の答ふるやう其御親切は身に染みて有難く別儀なれば何處までも御意に随ふ心算なれども小生は田安家に振擡せられ若年の身にも拘はらず一方ならぬ君恩に浴したれば田安家が今日の有様となれるを見棄てし一身の顯達を求むるは本意にあらずさりとして今日の御代を恨む心は毛頭無した微衷の在る所を御諒察ありて此まゝ風月の樂を續がしめ給へとして轉ばすべからざる決心の程を示しければ頼氏も大に感激し其後は絶て仕官を勸めざりき。

分は田安家の舊恩に對して青雲の望を絶ちしも將來輩出する少年を陶冶して國家の用に供せんとて田安家の學校を永久に維持せしむる方法を請じ舊君侯及び關係ある人々に説き廻りしかば君侯にも大に其篤志を愛てられ當時牛込山伏町にありし該校を建物器具圖書も其まゝ翁に與へられたり翁は太く打喜びて銳意育英の事業に心を委ね復他事無かりしが其頃同校の生徒にて翁の薫陶の下に人となり現今縉紳の列にあるもの頗る多しとか。

其内府立の小學校も所々へ設けられ右の學校も府廳へ献納する方然るべしとて田安家の聽許を得出願に及び一たび採用せられしが半年程を経て府廳より其儀に及ばずとて返還

せられたり、依て引續き生徒に教授し、明治十年都合ありて他人に譲り、牛込區神樂坂町に轉校し、爾來種々の變遷ありて、明治二十年頃廢校となりぬ、併し立志塾と云へるもの、其紀念として現今尙存立せり、兎に角翁の經歷は、少年薰陶のため、其心血を瀝ぎたるもの最も多かりしなり。
直景翁半生の經歷は、前記の如く幕府瓦解、王政維新てふ時代變遷の大過渡に際し、其が同僚知己の生涯は何れも波瀾曲折多かりしに、翁は恬淡寡慾自ら安んじて、志を仕途に絶ちしかば、比較的身の浮沈少し、斯くて明治五年の七月丹陵氏を儲けしが、宋人劉翥の節義に思ひ托せて、其名を身と命じたり、尤も立身の二字を合せたる文字なれば、將來を壽ぎたる意味も含

みしものなりとぞ、最初の志は丹陵氏も學の道を辿らせ、位山の彌高き榮をとの望みなりしが、氏は幼き折より繪畫を好みて、學者肌ならざるより、諺に云ふ嗜好こそ物の上手なれと、其好みに任かせて、九歳の時に、近所に住める文晁派の畫工許稽古に遣はしたり、其頃は丹青の道全く頽れ、一廉の名工も、扇繪團扇の畫などをものして、緩かに糊口と爲す程なれば、江湖に知られし畫工も、菊池容齋、松本楓湖數輩に過ぎざりし、容齋は明治十年に身歿り、殘るは楓湖のみなりしが、翁は丹陵氏を其門人と爲すべく考へたる事もありけり。
右の如く荒み果てたる丹青界も、一陽來復の時機到來、明治十五年に至り、政府の奨勵にて、繪畫展覽會の第一回を上野に開

く事となりぬ其の時川邊御楯翁が大幅の武者繪を出品して、第一等の名譽を博し、銀盃を賜はりしが、當時翁も其繪を一覽せしに土佐家の精華を發揮して、最良事なるに感じ入り、傳手を求めて丹陵氏を御楯の門人と爲し、爾來十一年刻苦勵精の結果丹陵氏の名世に喧傳せらるゝに至れり。其間氏は一時鑿劍に心を移し、繪筆を擲け棄て、竹刀を握るやうになりしを翁は太く譴責を加へ、今日の成業を見るに至りぬ。財政も豊かと云ふ程にあらねば、潤筆を利するやう仕向け來る人も多かりしが、翁は氏の修業中悉く之を斥け、丹陵氏をして専ら技藝を研かしめたりと。

翁の妻は六子と呼び、村田氏の本家より二十歳の折嫁し來り

て、一男四女を儲げ、男はやがて丹陵氏にして、女子の一人は寺崎廣業の室菅子、一は未だ嫁せず丹陵氏と共に繪畫を學び、其名を延子號を紫園と呼り。

翁は丹陵氏の技藝益進むと共に、畫界の刷新を圖る心切なりしかば、二十四年の秋氏を勸めて日本青年繪畫協會後に青年の二字を省くを創立せしが、其規畫は一に翁の考案に成り、寺崎廣業、小堀鞆音、梶田半古、山田敬仲等の諸氏も皆其指願に従ひたり。二十八年の第四内國博覽會にも翁は協會の委員長として京都に赴き、美術部の爲めに執筆する所多く、翁の丹精界に盡せる功績を記す序に傳ふべきは、前記六子刀自の事にて家庭に於ける慈愛は翁の嚴肅と並び行はれ、丹陵氏の今日あ

るを致せしが惜むべし三十六歳にして明治十六年に病死せしとぞ翁の経歴を聞くに及びて丹陵氏の盛名も偶然ならぬ事と思はれたり。

一 森 峯 子

(醫學博士森林太郎氏の母)

鷗外漁史の名は夙に文壇を風靡して凡そ耳ある者は鼎鑪も亦之を聞き誰か知らん其の本業は陸軍々醫監醫學博士にして文學は緒餘の遊戯ならんとは而も其造詣の深き優に道遙露伴紅葉と聲價を齊うし王揚盧駱の例に倣ひ四傑の目を設くべし人は謂へらく是れ天才なりと如何に天才なりとて

幼時よりの教養其宜しきを得ざれば争か専門一流の文士と肩を比するの地位に至るべき世に良妻賢母と稱へらるゝ者が兒女を産みて襁褓の初より天才を成就するまで家庭に於ける辛勞は容易の事にあらず茲に鷗外漁史の母刀自に就て其實例を得たり。

刀自の名は峯子石州津和野藩の醫師森伯仙の女にて森静男氏に配偶せられ男女四人の子を擧げぬ長男は林太郎氏即ち鷗外漁史次男は篤次郎氏とて今は醫學士三男潤三郎氏は目下早稻田大學に在りて史學を研究中の由女子は醫學博士小金井良精氏の令室喜美子女史にて淑徳の聞えあるのみならず亦閨秀文學者として人の知る所なり。

刀自は藩醫の家に生れて、別に不自由と云ふ事を知らず、静男翁との間も琴瑟相諧ひ、四人の小兒は孰れも恙なく生ひ育ちて、家庭は何時も長閑き春の糸いと未長く樂しき月日を送る者故、其經歷に就ては長安大道坦如砥とも評すべきか、迂餘曲折溪窮り路轉ずるの奇觀無し。されども大和撫子を愛しみ育て、色香美しき花の榮えを見るまで、庭の教の躰方、刀自の心盡しや如何なりけん、今の世の人々に告げ知らせて子育草の枝折にもと、其概略を記すべし。

問は男子の事のみ、女子は何事も慎ましげに内端なるこそ好けれ、なまなかに青表紙翻へして牛の角文字の出過たるは小面憎しとて、刀自にはいろは讀むことも教へざりし昔氣質の徹にては左もありしならん、殊に刀自は十歳の比まで普通の飲食を爲し得ぬ蒲柳の質にて攝生を專一となしければ學バの窓に籠るなど夢にも見ず、折々は父君より茴香持て來いとか、肉桂が要るとか、吩咐けられ、玄關に並べし藥箆筭の前に至れど、貼紙の文字を讀み得ねば、狼狽へて躊躇ふを醫師の家に生れて、藥の名一ツ知らぬとは何事ぞと、又も父君より籙籙一聲爲めに隠れ忍びて、いろはの獨稽古果は假名付の四書を購めて、覺束なくも文の林に分け入りぬ、これぞ他日鷗外漁史

が學びの道絶えて、刀自の膝下(ひざもと)にのみ任(まか)せし時、復習(ふくしゅう)を監督(かんぎやく)する助(たすけ)となりたるものなれ。其心掛(こころがけ)の殊勝(じゆしやう)なる孟母(まうぼ)斷機(たんき)の例(たと)を引くも、誰(たれ)か溢美(いっび)と云(い)ふ者(もの)あらん。

刀自(たみぢ)の父(ちち)君(きみ)伯仙翁(はくせんおう)は心構(こころがま)への堅固(けんこ)なるのみならず、身體(かみ)も巖(いん)壘(り)作りにて、加(く)ふるに醫師(いし)の事(こと)なれば、攝生(しやくせい)にも意(い)を用(もち)ひしが、頼(たの)み難(がた)きは人(ひと)の生命(いのち)泡沫(うたへ)夢幻(まげん)の譬(たと)に洩(も)れず、一年(いちねん)藩命(はんめい)にて江戸(えど)に赴(おもむ)き、其歸(そのかへ)るさに近江(おうみ)の土山(つちやま)にて旅寐(りよめ)の枕(まくら)に就(つ)きたるまゝ、此世(このよ)に残(のこ)るは蟬脱(せんでつ)の殼(か)魂(たましひ)は何地(いづち)へ行(い)きけん呼(よ)べども還(かへ)らずなりぬ。其翌年(そのあしたねん)の春生(はるまき)れしは、鷗外(おうがい)漁史(りよし)時(とき)しも世(よ)は徳川(とくがわ)の末(すえ)にて外國(がくこく)より打寄(うちよ)する荒波(あらなみ)は天(あめ)が下(した)の人心(ひとこころ)を騒(さわ)がせて幕府(ばくふ)の威勢(いせい)日に衰(おとろ)へ、勤王(きんおう)攘夷(じやうい)の説(せつ)を唱(とな)へて、將軍(しやうぐん)の指揮(しき)に從(したが)はぬ

大小(たひせう)名(な)もある中(なか)に、津和野藩(つわのぼん)と背(せ)中(なか)合せなる長州(ちやうしゅう)は、特に幕府(ばくふ)の忌諱(きご)に觸(ふ)れ、江戸(えど)より下知(げち)を諸藩(しよぼん)に傳(つた)へ、其罪科(そのざいこ)を正(ただ)すべしとて、軍馬(ぐんば)の催促(さいそく)頻(しばしば)りなり。果(は)は將軍家(しやうぐんけ)茂(も)自身(みづかみ)の出馬(しゅつば)となり、津和野藩(つわのぼん)は隣國(りんこく)の事(こと)とて、一層(ひとしほ)の大騒動(おほさわどう)何時(いつ)如何(いか)なる變事(へんじ)あらんかと、寢食(しんじよく)も安(やす)んぜざる程(ほど)なりしが、其時(そのとき)漁史(りよし)は甫(む)めて二歳(ふたさい)刀自(たみぢ)の懷(なつか)しさに抱(いだ)かれ、呱呱(こゝろ)乳(ち)を索(もと)むるのみ。

爾來(こゝろ)世(よ)は益々(ますます)亂(みだ)れて血醒(ちなま)き便(たより)のみ聞(き)く中(なか)に、刀自(たみぢ)の良人(らうじん)靜男(しやうなん)翁(おきな)は、藩命(はんめい)に依(よ)りて伯仙翁(はくせんおう)の箕裘(きせう)を繼(つ)ぎ、江戸(えど)の松本(まつもと)順(じゆん)佐倉(さくら)の佐藤(さとう)尚中(しやうちゆう)など、其道(そのみち)の大家(たいか)を尋(たづ)ねて、専(もっぱ)ら修業(しゆぎやう)に心(こころ)を委(ゆた)ねければ、自刀(たみぢ)は頭(くわん)是(ぜ)なき漁史(りよし)を相(あ)手に空閑(くうげん)を守(まも)り、東(あづま)の空(そら)をながめて良人(らうじん)の身(み)の上(うへ)を憂慮(うれ)ひ、庇洩(ひしほ)る月影(つきかげ)に夜(よ)の深(ふか)くも知(し)らで

婦娥の孤栖を相憐み霜夜の蛩と共音に泣ける事も幾度なり
けむ。
斯る中にも刀自は漁史の養育に心を盡し其が六歳の折は藩
の學校なる養老館に通はせ螢雪の修業を爲さしめける併し
其頃の學問と云へば専ら漢學のみにて今より思へば頗る可
笑しき節もあれど規律の嚴重なると武士氣質の道徳を涵養
するとは亦感すべき處もあり刀自より聞き得たる話に依れ
ば此養老館は時の藩主今の龜井子爵の祖父の所に興された
るものにて毎月一六の日には藩中の子弟を呼び集へ其成績
を比較せし上るれ賞品を與ふる掟なり先づ初年の入學
者には四書の素讀二年目は五經三年目は左國史漢といふむ

づかしき課目賞品は初年が四書正文二年が四書集註三年に
五經と云ふ順序なりしと鷗外漁史も六歳より其掟に従ひて
三年目の課業も將に卒へんとせし時即ち八歳の十月に藩籍
奉還と云ふ大變動あり爲めに養老館も閉ぢられて漁史は終
に五經の賞與を貰ひ損ねたり八歳の小兒に左傳國語なろ途
徹も無き書物を讀ましめたる徳川時代の教育は如何に馬鹿
々々しきものなるか想像にも及ばぬ事なるが亦漁史の夙悟
穎敏なる一端を知るべし。されば藩中にては當時漁史を賞め
讃し往來にて出て遇ふ人々互に指し示してあれ彼處へ五經
を貰ひ損ねし小兒が通るとて一時の評判驚しかりしと。
八歳の小兒が四書五經左國史漢まで讀み上げたりとは實に

恐ろしき教育の仕方、小さき脳髓の能くも思ひ切つて詰め込
みしものかな、當時に在りては敢て不思議にもあらざりしな
らん、併し峯子刀自が我子の學問上達を冀ふに就て、其辛勞は
如何ばかりぞ、茲に一斑を記すべし。
漁史の父君静男翁は前に述べたるが如く、始終留守勝なれば
刀自の手一ツにて何くれとなく教へ育みける中に、素讀の復
習も刀自の監督する事なれど、元はいろはさへ碌々習はず、藥
の名をも知らぬ身にて、獨稽古の假名附四書を資本に、覺束な
くも漁史を教へ導きたり、初の程こそ漁史も母を此上なき先
生と信用せしが、漸々内兜を見隙して侮どる氣色も見えけれ
ば、是てはならずと刀自も一生懸命毎夜我子の眠に就くを待

て明日の學課の下調孤燈の下に書繰り返して夜の明くるも
知らざりし、刀自は當時の事を打明けて「實につらいと思つた
ことも度々で御座いました」と、左もあるべし。
斯る次第なれば、漁史の評判は益々高く、森氏こそ好き子を
持ちけるよと、玄風稱龍の目を興へければ、養老館の閉校する
前年の冬、藩の表用人兼側用人を勤むる清水格亮と云へるも
の、藩主の内命を受けて、静男氏を招き、其方の倅は幼少ながら
學問の成績特に見上げたる者にて、將來頼もしければ、江戸へ
修業に差し出されては如何に、左すれば君侯より手元金を
賜はるべし、併し十歳未満の者を公然に召出したる例なき故
是は密々の相談なりと、異數の恩命を傳へられたり、此の時藩

主は内外多端にて人材の必要を感じ、且つ西洋の學問も行く
くは開け來らんとて、遠慮ありけるより、漁史に學資を與
へ、江戸の西周氏の許へ遣はす心算なりしと云、右の如く類例
無き命令を受けたる漁史の親心は如何に嬉しき事なりしか
云ふもなかく、あろかなり、されども十歳に足らぬ小兒の將
來は親の心にも見定め難く、切角の君恩を畫餅にすることあ
らば、家の瓊瑤世間の物笑ひともなるべしと、靜男翁は他日の
事まで遠慮して遂に御受を爲さざりしかば、此事は其まゝ沙
汰止みとなりたり。

其後王政維新に際し、藩主が藩知事となられし時、藩中の俊才
を一人選抜して、東京へ修業に出したるが、即ち今の理學博士

小藤文次郎氏なり。漁史は養老館閉校の後、刀自の勧めにて漢
籍の稽古を廢め、同藩の蘭醫室良悅の許に通ひ、蘭學の研究を
始めしが、此時に至りて刀自も漸く復習のために苦めらるゝ
事無く、十一歳の折には父に隨ひ出京して、西周氏の薰陶を受
け、進文學舎より大學東校に進みたりき。

喜美子女史教養の事に就ても記すべき話あれども、餘り長き
に過ぎたれば、こゝに省けり。

靜男氏は天保七年の生れにて、去二十九年還曆の齡を迎へた
るが、心無き春風に誘はれて、櫻の花と共に散り失せ、刀自は良
人と十歳違ひにて、今年五十八歳、駒込千駄木の邸に長閑なる
生涯を送り居れり。

一 志 賀 淑 子

(農學士志賀重昂氏の母)

志賀重昂氏の名は在野の政治家として世に隠れなく兼ては地理學に精通の間は高く乾燥無味なる斯學に能く文學を調和したる手腕に至りては實に方今無二と稱せらる氏の母刀自は淑子ぬしとて今猶健全に消光せり。刀自は參州岡崎藩の弓術師範役松下源之進の次女にして十六の時同藩の儒者にして兼ねて弓奉行を務めたる志賀熊太翁に嫁しぬ熊太翁は即ち今の重昂氏の父にして刀自は氏の外に長女千代子次女悦子の二女を生みぬ長男たる氏の生れ

しは實に元治元年の事なれば此頃より世の中漸く騒がしく江戸幕府の勢威愈よ衰退に赴くのみなれば何時事破れて世は修羅の巷に化せんも計り難く各藩に於ても急に武器の入手を施し鑄たる鎗刀等を研ぎつゝ何れも非常の用意を怠らざる状態とはなりぬ。こゝに刀自の良夫熊太翁は先祖代々同藩の儒學を預る家筋に人となりたれど常に藩士等に儒者と呼ばるゝを甚く嫌ひて夙に尙武の志を立て吾は元より儒者ながら決して武道に暗きものにはあらずとて武藝百般を練磨する事怠りなければ殊に弓術の一道に掛ては藩中他に技を比ぶるものなきに至りいつしが弓奉行とはなりけるが世の中亂れに亂れし慶

應明治の間翁は京都へ貢士に召されて、暫時彼地へ出張しけるに計らず其地に病を得て遂に起たず、空しく彼の世の人となりしが、刀自は此時年僅に廿二才、重昂氏は漸う五才の幼兒なりき。
恰も此時二人の姉妹は僅に二三歳に達せしばかりなれば、良人に先立たれたる刀自の困難大方ならず、それさへあるに各藩とも此頃の規定は、戸主にして十五歳未満の時は、容赦なく家祿を没收するといふ事にて、岡崎藩もまた其例に漏れざりしかば、志賀家もまた此憂目に遇ひて、忽ち家祿家財は召上げられ、今は獨立の生計、覺束なきに至りしより、止むなく刀自は三人の小兒を携へ、其實家に扶助を受る事となりぬ。

斯る程に一家の不幸は之のみに止まらず、世はいつしか廢藩置縣となり、四民平等の制をしかるゝに至りしより、今は武家とて高楊子して世を過すべき道とてなければ、刀自等も空しく、實家に身を寄する事もなり難く、各離散するの悲境に陥り、こゝに志を勵まして自活の道を講ずる事となりき。
幸ひなる哉、刀自は裁縫にかけて並々ならぬ技術あれば、差詰め、之をもて其身と子女三人の口を糊する事と定め、即ち附近の子女を集めて裁縫の教授を開き、傍ら知人の依頼に應じて、弘く裁縫を引受くる事とし、新に然るべき住家を借りて、弟子には常に懇篤をもて臨み、依頼者の仕立物は、いつも注意を怠る事なく、時には夜を徹してまでも、只管其得意を大切に、細

々ながら漸く母子四人の生計を立てぬ。
斯て果敢なく其日々々を過し行く内長女千代子は不圖せし
風邪の心地に打伏せしが、それより容易に枕上らず、刀自は元
より多くもあらぬ子女なれば、如何にもして少しも早う快よ
き方に向はせたとて、其看護暫時も怠る事なく、其間猶頭是
なき二見の世話は更にもいはず、絶えず年若き弟子どもの教
授を爲しつゝ、一方ならぬ艱苦を積みぬ。さもあれ千代子の命
はこゝに限やありけん、種々の心盡しも其効なく、空しく黄泉
の客とはなりぬ、刀自が悲嘆やいかなりけむ。
長女の逝去に一時は甚く心を落せしが、斯てはならじと刀自
は漸うに氣を取直し、猶も變らぬ困苦の中に重昂氏と悦子ぬ

しの養育を事としけるが、世は明治の六年となりぬる頃教育
事業漸く緒につき、此處彼處に小學校の設立を見るに至りぬ。
此時刀自は重昂氏を入學せしめんものと心ばかりは早りた
れど、如何にせん女の織手もて母子三人の生計を立つる身は
容易にさる餘裕を造るべくもあらず、如何はせんと百方心を
悩す中、折しも附近に住せし近藤某なる人、其悲境に甚く心を
寄せて、學校用具一切を求めて送り越したれば、それにて氏は
僅に小學に入るを得たりきとぞ、當時の状態察するに餘りあ
り、斯て氏が十一才の春を迎へし頃、兼て父熊太翁の門人なり
し土屋光春、緒方中信等の主唱にて、先師の恩に報いん爲重昂
氏に學費を送り、東京へ遊學せしめんと、の決議をなし、刀自に

其趣を傳へしかば氏は直に芝新錢座なる近藤眞琴翁の攻玉社へ入學する事となり、斯て後札幌農學校に轉じ業成りて農學士の稱號を受くるに至りぬ。
重昂氏が遊學の間刀自は以前に變らず郷里岡崎にありて、手許なる次女を相手に益す人仕事に力を入れ、絶て他人の扶助を仰ぐ事なく、獨立獨歩の生計を續け居たりき。
斯て氏の業漸く成り、廿年の頃にやありけん、本郷眞砂町に小やかなる假寓をなしける、砌始めて刀自を郷里より迎へけるが、これぞ母子十三年目の對面なりける、それより以後は常に氏の許にありしが、二十九年中氏の南洋に航せし間二箇年ばかりは、次女が嫁したる家へ赴きつゝ、何くれと孫の世話など

怠る事なく、氏の歸朝後は再び其許に戻り、朝夕勝手元の事まで心にかけて、ありし昔の困苦を忘れず、常に下女どもを戒めて、只管節儉を旨としけるが、先頃より氏の邸宅とは程遠からぬ、赤阪榎坂町の隱宅に移り、今は極めて閑散に日を送る事はなりぬ。
刀自は實に本年六十二才の高齡なれども、耳目より齒の末に至るまで些の故障なきは、更にも云はず、他出の時も曾て杖など手にしたる事なく、鏗鏘壯者も及ばずとか、其最も好む處は陶宮術にて、常に之を以て其身を省み、時に春秋の氣候よき折は、出て附近の名所舊蹟を探るを又なき樂となす由なれど、思ふに、こは重昂氏の地理學より感化されたる處もあらむ。

斯く今は何不自由なき樂隱居の身上ながら刀自は世の人の
多くと異り、年猶若うして早う良人に死別れ、それよりの艱難
大方ならず、具さに浮世の辛酸を嘗めける事として今に至るも
決して驕奢の念を起さず、其衣類等も極めて質素なるを好み
殊に裁縫の一事に至りては、これもて多年の間露命を繋げる
例もあればと、老年の今も決して他人の手に委ねず、其衣服は
悉く自ら裁縫するを常となし居れり。
刀自はまた誰に師事せし事なけれど、折にふれて國風を詠ず
るも屢々にして、今其二三を拾へば、先年重昂氏が廣東福州の
邊を漫遊せる砌時は、寒中ながら彼の地は殆んど我夏時と異
らず、夜は常に蚊遣火を焚く状態なりなど、具さに事情を刀自

に報じ越したる事ありしに、刀自はそれを甚く珍らかに感じけ
ん。
我國の寒さ忘れて君は今いと珍らしき蚊やり火のもと
と詠じて、返事の中に封じけるとぞ、猶冬月の題を得ては、
霜結ぶ野面の菴のふくる夜はわきて淋しき冬の月かな
など詠みたる事もあり、元より斯道に入立ちたる業ならねど
流石に嗜好の道とてまた捨て難き節多きは、思ふに朝夕風流
の心懸深きに因れる事なるべし。



一三 澤 簡 德 翁

(海軍少將澤良渙氏の父)

現時海軍少將の位置を占むる澤良渙氏の父澤簡德翁は其昔
徳川旗下の臣にて家祿六百石を領し北豊島郡三河島及び茨
城地方に采地を有せし者なるが幕府瓦解の後も其才識人の
知る所となり二十餘年間神田區長の職を奉じ公務に熟掌し
て忠實恪勤の聞え高く今は貴族院議員の榮職を荷ひ七十四
歳の高齡にて最幸福なる生涯を送り居れるが先づ其經歷に
就て聞き得たる所を記さん。
簡德翁は徳川武士の氣風柔弱に陥り大小は伊達の表道具眉

毛を細く剃り付けて雪駄ちやらく兩袖を突張てオホンと
氣取りし咳をする不所存者多き中に専ら武藝を勵み殊に砲
術の研究に必を委ね其頃種ヶ島と稱する短銃及び火薬の製
法に就て自ら發明する所あり併し絳灌隨陸の警を取りて文
武は車の兩輪鳥の双翼の如しと文學も常に師を求めて講習
し澆漓滔々たる八萬騎中に於て嶄然頭角を現はせる一人な
りし。
然るに翁の少時は家政頗る困難を告げ三河島の領地より得
る所歲額三十餘兩常陸の領地として抄々しき收入無く槍一筋
の體面を張るには容易の業にあらず其頃牛込白銀町に住居
せしが牛込の貧乏邸と云へば其名を呼ばずして人々の合點

する程なりき。
 斯る貧苦の中に人となりたる翁は、艱難汝を玉にすとの格言を守りて、聊かも撓む色無く、衣食の餘資あれば、文武の師を尋ねて束修と爲し、身には粗末なる木綿物、それも古びて穢苦しき衣服を纏ひ、臆面も無く、綺羅を飾る若殿原に立並び、他人の嘲けり笑ふも顧みず、専ら稽古を勵みければ、早くも幕府の執政に其器量を見込れ、外國奉行の職に就くこと三たび、又講武所の世話掛りとなり、勝手元も稍豊かなる生計を爲すやうに至りしが、身を奉ずるは極めて薄く、邸内には有爲の少年を多く養ひて、衣食を給しつゝ、文武の技藝を研かせたり。其當時小永井小舟なども、翁の邸内に身を寄せて、翁の子弟及び寄食の

少年に讀書など授け居たりと。
 其後世の中益々騒がしうなりて、京坂地方には天誅組の騒ぎ起り、等持院なる足利尊氏の木像を刎ねて、三條大橋に梟す者さへあり、血氣に急る少年等は、何か天下に事あれかしと待設けたる矢先、右の次第なるより、密かに脱走して、心得違ひの事を仕出さんとする者ありしかば、翁は大に之を憂ひ、専ら鎮撫の策を執りしに、果は少年等に怨まれて、暗殺の難に遇はんとせし事數度なりしと云ふ。
 恰も其頃翁は公務を帯びて京地に旅行し、暫時本願寺を旅宿に充て居たる事ありしが、豫て翁を國家の奸賊なりと誤解せる血氣の若者數人早くも其居所を突止めけん、或夜深更に及

ひ何れも長やかなる帯刀の鞘を拂つて同寺に亂入し、此處彼處と隈なく寢所を搜索する處ありしが幸なるかな翁は其者等に面を知られざりしが上、入口に近き一室に眠り居りたれば、よもや翁の斯る處に伏し居るべしとは知るべくもあらて手を空しくして引上げしより危き災難を逃れしが、一は翁が運命強かりしにも因れるならむ。
公務果てと事なく江戸へ立歸りてよりも、旗下の武士の嫌疑いよく、深く殊に各藩脱走の浪士は晝夜翁の隙を窺ふ事絶ねば、遂には幕府の疑ふ處となり、罪なくして空しく配所の月を見るに至れり。斯て牢舎にありし事實に三年の久しきに涉りしが、其間は妻女幹子刀自能く數人の子女を督して常に教

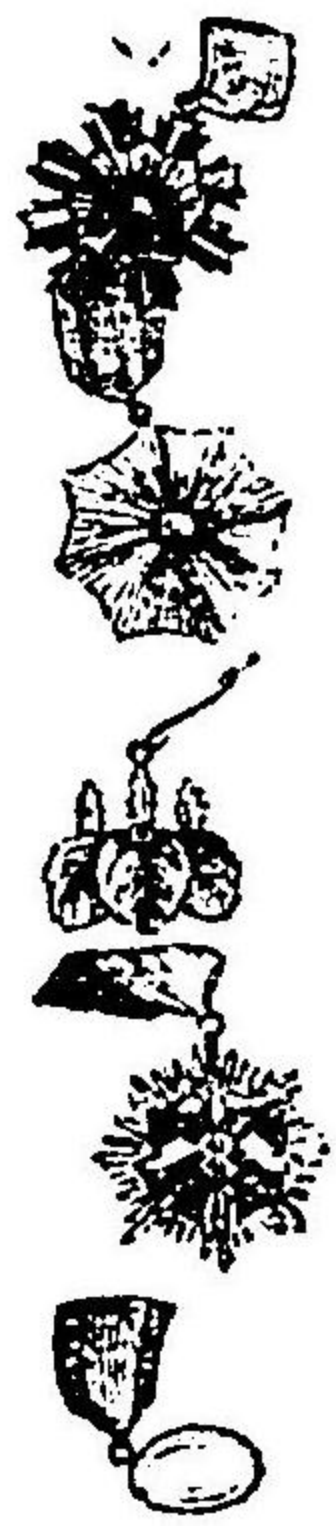
育の任に當り居たりきどなむ。
斯る程に身に振懸りたる嫌疑は殘なく解けて、いつしか解放の事となりしも當時の掟は解放後も門戸を閉ざし堅く謹慎を表する事なりければ、翁は即ち其頃の邸なりし小石川關口町に閉居して、其間専ら子女に漢籍を授くる事とはなしぬ。
程なく世は王政維新となり、幕臣の面々は種々の轉變を免かれざりしが、翁は此時一家を擧げて、舊領地三河島へ移り、刀執る手に鋤鍬を握りて心靜に世の成行を觀望しけるが、早くも新政府の事業着々緒に就き、民部刑部兩省の設置を見るに至りし、砌翁は勝伯等の推す處となり、度々の辭退も否むに由なく、遂に刑部省の少丞に職を奉ずる事となりぬ。其辭命を受け

んとして太政官へ出頭したりし時は翁の服装兩刀を手扱みたる昔の面影更に見る由なく、一見さながらの農民なりしかば、知る人餘りの變化に只驚くより外なかりきとぞ。翁の一度推されて新政府に仕へてよりは異常の才學衆に越えて職務に精勵なる事比ぶるものなければ、何時まで空しう少丞の位置に留るべき程なく昇進して大丞に至りしが即ち今の奏任判事の最上席に當れる顯職なり暫くにして翁は大坂裁判所長に轉じ、未だ幾何の日子を経ず更に累進して入間福岡若松三縣の縣令となり、任地到る處に良縣令の譽高かりしが若松縣のいつしか福島に合併せられ廢縣に歸するに及び翁は即ち勇退して東京に歸り、閑雲野鶴再び風流三昧に世

を送る事となりぬ。斯る程に大久保一翁の出で、東京府の知事となるや、設計する處極めて多かりし、中に市内を第何大區何小區とやうに區劃し、それ／＼取扱所といへるを設けて市政の便宜を計りけるが明治十年府民の爲め感ずる處あり、自分に乞ふて東京府第四區長たるに至り、後區制を布かるゝに際し、即ち神田區長に任せられ、爾來去二十九年まで勤務二十餘年の長日月に及びぬ、其間の状態は既に世人の弘く知れる處なるを以てここに述べず、二十九年中老體の故を以て其職を辭すや、區内有志者は翁が多年の勤勞に報いんが爲金盃一組を贈りて其意のある處を表せしは、實にさる事ながら、身區長にして斯の如き

榮譽の中に辭任せるは、蓋し翁に於てのみ見るべき事なり。翁は幼少より身體頗る壯健にして、猶年若かりし頃は酒量も人に越えて優に大酒家の列に入りしが年と共に酒量も自づと減じ老年の今日は僅に晩酌二三合を傾くる位なれど、元より好める處とて滋養半分常に之を用ひ居れり、さもあれ若年の頃より此爲決して心を亂さず兼て幕末の頃一家の困苦甚だしく其中にありて十數人の子女の養育を務め常に節儉を事とし來りしより、今何不自由なき位置に至りても、翁はありし昔の境涯を忘れず、平常質素を旨とし、絶えて奢侈の念を起さず、いつも子弟等に此事堅く戒め居れりとなむ。

身を固めければ如何に老體の今日とて、飽食暖衣空しく安坐し居らんには、身體の營養必らずや悪かりなんとて、只管運動の方法を心懸け、老體に適すべき術もやと密に思ひを碎きしが、恰もよし同じ舊幕臣なる小笠原清務氏が、疾より同好の士を語らひ、弓技會と云へるを設立せる由聞込みたれば、早速其會に加りて時に同會の射的場に赴きては、弓術に昔時の手練を示すといふ。翁又書を好くし、其號をも雲處と稱し、家にありて餘暇ある時は、詩歌を絹紙へものしては、獨徒然を慰め居れり。



一四 梅 薫 翁

(法學博士梅謙次郎氏の父)

梅謙次郎氏が學者としての聲名は、今更述ぶるの要なけれど、其今日に至りたる閱歷を見れば、決して順境に立ちたる事なく、常に逆境にありて困苦勉勵せし人なり。而して今日の成功を見たるは、一に父翁の指導宜しきを得たる結果に因るべし。梅家は代々出雲藩の抱醫にして、薫翁には曾祖父なる道竹氏は其中興の祖なり。氏は若年より同地の在に開業醫をなし居しが、二十才の頃思ひ起して長崎に遊び、同地の外科醫本川道充の門に入りて、同家にある事實に二十餘年業成りて故國に

歸り再び開業醫をもて渡世とせしに、早くも其技倆藩主に知られて、始めて扶持を受け、其抱醫となりぬ。其子道榮氏も又長崎に出で、同じく本川門にありて、螢雪の苦を積み、業成りて歸國の後、父道竹氏已に齡傾きたるを以て、家を道榮氏に譲り、身は以前の扶持をさながらに隱居料として受くるに至り、藩主の優遇一身に餘りしが、不幸道榮氏は家を嗣ぎたる後二三年にして、未だ齡四十に至らず、歸らぬ旅路に赴きたれば、其子道竹氏(祖父と同名)後を嗣ぐ事になりぬ。梅家は道竹氏に中興せられてより、以來藩の抱醫たる事三代に及び、今は藩と切つても切れぬ關係を生ずるに至りしが、不幸にして後の道竹氏には、女子一人ありしのみ、他に一人の子

女なかりしかば、爰に養子の必要起りぬ。薰翁は實に其養子にして、十九才の時或事情否むに由なく、入つて梅家を相続せるなり。

翁は本性江澤と稱し、元より醫業に毫も志望なかりしのみか、醫師は其最も嫌ひたる處なりしに、一片の事情さがたくして、遂に醫家の養子たるに至りしより、心中常に不快に耐へざりしが、さりとして己の一心もて祖先の家職を抛つ事もならねば、こゝに年來の望を絶ちて、専心醫學を研究する事と決し、十九才より二十三才に至る五年間は、夜の目も合さず、鋭意勉勵したる効ありて、見事養家の名を汚さず、藩主の覺え愈よ目出度き事とはなりぬ。さもわれ養家の光榮は、翁一身の不本意に

して心中密に遺憾に耐へず、其日々を送れる中に、二十五才に至れる時始めて一男子出生せり、是に於てか翁は全く其志望を絶ち、己は一意何事も養家の爲に圖り、年來の本望は其兒をして嗣がしめんものと、これより只管幼兒の生長を樂しむつゝ、身は嘗て最も嫌ひたる醫家に安んじたりき。其時生れたるは長子にて名を錦之丞氏と呼び、後二年にして謙次郎氏は生れぬ。されば翁の喜悅いはん方なかりしが、身は俗務に何かと忙しければ、其教育萬端は擧げて之を養父道竹翁に托し、錦之丞氏が七歳になりぬる時始めて之に漢籍の書讀を授けぬ。此頃謙次郎氏は僅に五歳の幼兒なりしが、常に兄の傍にありて、其讀書を聞くを好み、祖父が二度と繰返せば何

時^つも开^{ひら}を残りなく覺^{おぼ}ゆるといふ有^あ様^{さま}なりしかば、其^{その}後^ごの教^{けう}育^{いく}は凡^{すべ}て兄^{あに}弟^{にい}同^{どう}一^{いつ}の書^{しよ}を讀^よます事^{こと}となりぬ。
斯^かる程^{ほど}に翁^{おきな}の三^{さん}十^{じゆ}三^{さい}歳^{さい}に至^{いた}れる時^{とき}、養^{やう}父^ふ道^{だう}竹^{ちやく}翁^{おきな}は無^む情^{じやう}の風^{かぜ}に誘^{まよ}はれて空^{そら}しく黄^{わう}泉^{せん}へ旅^{たび}立^たちければ、翁^{おきな}は其^{その}後^ごの家^か庭^{てい}萬^{ばん}事^じを何^{なに}くれとなく手^て一^{いつ}つに處^{しよ}理^りし、此^{この}頃^{ころ}より已^{すで}に痼^こ疾^{じやく}を發^{はつ}しなごら、一^{ひと}度^ど君^{きん}侯^{こう}の供^{とも}して京^{きやう}の地^ちに入り、半^{はん}年^{ねん}餘^よを其^{その}處^こに勤^とめて歸^{かへ}郷^{きやう}の後^{のち}は、やがて家^か督^{とく}を相^{さう}續^{ぞく}せしかば、責^{せき}任^{にん}益^{やく}す重^{おも}きを加^{くわ}へぬ。

しが元^{もと}より豊^{ゆたか}ならぬ生^{せい}計^{けい}とて、遠^{とほ}く離^{はな}れ居^をりては常^{つね}に不^ふ自^じ由^{ゆう}勝^{かち}なりければ、翁^{おきな}は遂^{つい}に意^いを決^{けつ}して國^{くに}を後^{あと}にし、自^{みづか}ら出^{しゅつ}京^{けい}せしは、やがて明^{めい}治^ち七^{しち}年^{ねん}の事^{こと}なりき。さて差^さ當^{あた}りての翁^{おきな}が職^{しやく}業^{げふ}は同^{どう}じく醫^いを以^{もつ}て渡^{わた}世^{せい}とする事^{こと}なりしが、一^{いっ}藩^{ばん}の抱^{かか}醫^いとして養^{やう}家^かにありける程^{ほど}は、兎^とも角^{かく}も元^{もと}より好^{この}まぬ道^{みち}なれば、新^{あらた}に知^しらぬ土^と地^ちに開^{ひら}業^{げふ}してより、何^い時^つも面^{おも}白^{しろ}からざる事^{こと}のみ續^{つづ}きて、其^{その}後^ごの困^{こん}苦^く一^{いっ}方^{かた}ならず、遂^{つい}には勞^{らう}働^{どう}を爲^なさぬば、かゆの状^{あひさま}態^{たい}に陥^{おち}りしかど、絶^たえて子^こ息^{そく}の教^{けう}育^{いく}怠^たる事^{こと}なく、延^ひひては錦^{きん}之^の丞^{じやう}氏^し兄^{あに}弟^{にい}も父^{ちち}と其^{その}苦^くを共^{とも}にしつゝ、只^{ただ}管^{くだ}學^{がく}事^じを勵^むみたりき。
兄^{あに}弟^{にい}の苦^く學^{がく}は實^{じつ}にさる事^{こと}ながら、斯^かくまで逆^{さか}境^{きやう}に沈^{しづ}みつゝ、其^{その}兒^こをして少^{すく}しも後^あ安^{やす}からしめんものと、其^{その}身^みの勞^{らう}苦^くをつゆ厭^{いと}

はず、常に學事を奨勵せし翁の心事は正に歎稱すべきものあらむ。これぞ翁が若年の頃如何に事情さがたしとは謂へ、思ひもよらぬ家の養子となり、我初一念寸分も貫くに由なく、一生を空しく遺憾の中に暮したるより奮勵一番其愛兒をして志を嗣がしめ何事も其望を妨ぐる事なく、各自の長所を充分に發揮せしめんとどの考案に出でたるに外ならざりき。

兄弟の苦學早くも効を奏して、錦之丞氏が醫科大學を卒業せしは、實に明治十二年なりき。續いて海外に遊ぶ事前後五年、歸朝の後には眼科専門を以て大學に教鞭を執る身となりしが、其頃の規則として官費洋行者は、六年の間文部省の指定せる處に勤務すべき定なりしかば、氏は其年限を専ら大學の爲に力

を盡し、それ以外には假令親戚縁者たりとも決して診察などしたる事なかりし程に、森有禮子の出で、文部に大臣となるや、件の規則もいつしか改正せられしより、氏は早速出診所等を設け、徐々私立大病院の創立を企圖せし中、年僅に二十九歳にして果敢なく病死しぬ。

謙次郎氏は元より梅家の別家として、長兄の借錢辨償の義務なけれど、其没後父翁の困苦を見るに忍びず、自ら進んで其債務支辨を思ひ立ち、今は盡く其責を果したりといふ。謙次郎氏が常に父翁の身上を思へるは、尙之のみに止まらず、其會て洋行を命ぜられし折も、老體の父翁を思ふの餘开を辭せんとしたる事さへありきとなむ。斯て翁は現今相州酒匂の別業にあり

て年來の持病を養ひ居れり。

一五 岡野春子

(法學博士岡野敬次郎氏の母)

法學博士岡野敬次郎氏の實弟には、法學士川田敬三氏ありて日本銀行員たり、次に工學士岡野昇氏ありて、又現に日本鐵道會社水戸保線事務課長たり。斯くまで打揃ひたる兄弟を能く困苦の間に育てしは、其母春子刀自にして、刀自は良人の没後其精神を嗣ぎ、夙に愛兒の教育に力を注ぎし人なれば、其今日の功を收めしも實に偶然なりと謂ふべからず。刀自の良人は親美翁とて、元は幕府に仕へたる人なりしが、廢

藩置縣の際上州岩花縣の少參事となり暫く彼地に赴任しけるが獨つらく思ふやう、此身の榮達は如何にもあれ、永く斯る片田舎にありては、小兒の教育何かと思ふに任せぬは千秋の恨事なり、如何にもして東京に出で、身はよしや襁褓を纏へばとて、兒等に充分の教育を授けばやと、屢々事に托して職を辭したりしが、いつも其意の達し難かりしより、果は向島に形ばかりの地所を求め、是より農をもて渡世とすべければとの理由をもて漸く職を辭し出京せしは、明治五年の事なりき。其頃翁の愛兒は敬次郎氏と亡兄勝太郎氏の二人なりしが、出京の主旨は元より農業ならぬ兒等の教育にありしかば、やが

て下谷徒町に小やかなる一家を構へ、親友某に二兒の教育を托し、翁は印刷局に出仕して生計を立つる事とはなりぬ、さもあれ當時猶附近に完全なる小學といふものなかりしからに、此幼なき兄弟は常に漢學習字等の古風なる教育を受け居りしが、翁は早くも洋學の必要を知り、程なく兄弟を神田淡路町の共立學校に入らしめぬ、後二年にして敬次郎氏は英語學校へ轉ぜしが、勝太郎氏は引續き共立學校に在る事變りなかりき。

斯る程に明治九年翁は勝太郎氏等兄弟六人を、春子刀自の保護に任して、瀟焉世を去りぬ、元より貯蓄としては數ふるに足らぬ、身代なるに永の病氣に惱みしかば、其間の入費實に夥しく

翁が没後は一家を支へんの資力も覺束なげなりしかば、親戚の誰彼いたく將來を氣遣ひて、教育も事にこそよれ、此上は兄弟の二人を給仕になりとも出して、家計の手助にするころよけれど、種々に勸むる處ありしが、刀自は此時一切是等の言を排して云へるやう、良人は夙に子女の教育に重きを置きたりしを如何に今日に追はるればとて、未だ墳墓の土も燥かざるに忽ち其方針を改めんは、妻たる身の餘りに俯甲斐なき極みなれば、女子ながらも其遺志は貫かんとて、また動く處なかりきとぞ。

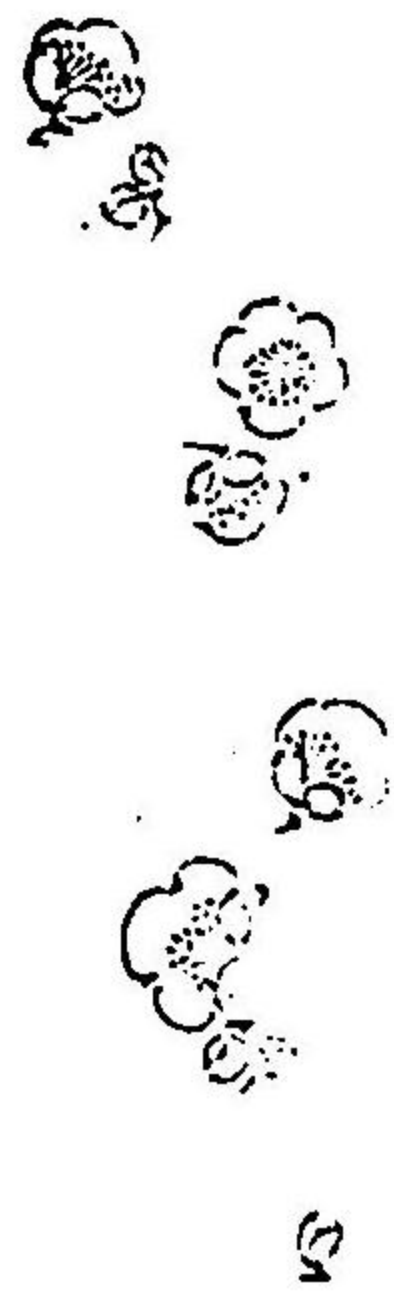
其頃の住宅は下谷練堀町なる、現今の桐淵眼科病院のそれなりけり、家内の割にはいと手廣き家なれば、萬事に入費も少な

からず、殊に定まる収入なき身にて斯る邸宅に住へるは、刀自が氣丈の程も推して知るべく、早くも其状態を見透して其家を買はんとする者數多ありしかど、刀自は女の手一つに猶三年の間能く其家を踏答へつ、子女の教育片時も怠る處なかりしは、實に男耻かしき心とや謂はむ。
其後は最寄なる二長町に小やかなる一家を借受けて之に移り、勝太郎氏は相變らず共立學校に、敬次郎氏は豫備門に其他の弟妹もそれく附近の小學に通學させて、只管教育をのみ事としけるが長兄勝太郎氏は幼時より兎角弱き身なりし上二三箇年引續きて健康常ならざる處あり、十九歳に至れる時年來の持病愈よ重りて遂に歸らぬ人の數に入りぬ。

是に於て次男なりける敬次郎氏は、唯何事も母刀自の相談相手となり、多くの弟妹等を一身に引移けて其世話を爲すべき責任ある身となりしが、其頃東京大學の規則として、學生にして寄宿舎に入らざる者は、月々の給與費四圓五十錢を受る事能はず、敬次郎氏が當時の状態は云ふまでもなく給與費なくば、修業の程も覺束なかりしかば、刀自は勸めて氏を寄宿舎に入らしめ、身は幼き子女のみを相手として常に其監督を嚴にし居りしが、専心學事に務むべき身にありながら、氏も流石に家の事絶えず心にや懸りけん、いつも土曜より日曜に掛けては家に歸り、何かと母刀自を慰さむるを常としたりき。斯る不幸の中に多年の苦學早くも其功を奏して、明治十九年

氏は目出度大學を卒業しぬ。此頃は已に弟妹の年齢も長じて各自中學女學校などへ轉じたる事とて、其入費も俄に増してなかく、從來の比にわらずされば氏は大學の卒業を幸ひ片時も早く何處へか定まる職を求めて月々の収入を計るべかりしかど、當時氏の年齢僅に二十二才なりしかば、嚴めしき法學士の稱號こそ荷へ、未だ社會に立つべき資格もなかりしより、刀自は猶も困苦を忍びて引續き大學院に入らしめぬ。斯て氏が二十四年留學生として海外に遊び歸りて二十八年大學助教となれるまで家には、一人の稼人なきに、刀自は僅かなる良人の遺産を監理して常に儉約を旨とし、多くの小兒を甲乙なしに勉學せしめしは、當時の困難察するに餘りあるべし。

刀自は堅く良人の遺志を嗣ぎて、専心子女の教育を事としけるが、敬次郎氏が大學助教となりぬる時まで十餘年の間、能く僅かばかりの遺産を守りて、少なからぬ家族の糊口を過し何れも學事に入費を惜む事なかりしかど、永年の間絶えて一文の借錢を爲さず、敬次郎氏が成功の後些の迷惑を懸けざりしは、特筆すべき處なるべく、延いては現今にても何不自由なき樂隱居の身上ながら、いつも節儉をのみ旨として些か奢る處なく常に昔時の状態を忍ぶ種とし居れり。刀自今年六十六才、健康若かりし頃に異ならずとかや。



一六 益田 鳳翁

(益田孝同克徳氏等の父)

現時の實業界決して其の人に乏しからざるれど、能く兄弟打揃うて世に其名聞えたるは、思ふに益田一家の孝克徳英作氏等三兄弟に如く者あらざるべし。斯る子息を養成したる父翁は、今猶健全にして下谷下根岸の別業にあり、本年實に七十七歳。翁は名を鳳と稱し、幼名鷹之助と云へり。佐渡國相川の人。文政十年四月を以て生れぬ。家は代々佐渡奉行配下の與力なりしが、七歳の時父に死別れてそれより辛くも母なる人の養育に

(八四一)

人となり文武の道を怠る事なく、二十歳を過る頃同國鹿野源右衛門の娘らい子を娶り、二十三歳の時長男孝氏を擧げ、二十六歳にして次男克徳氏を生みぬ。斯て二年を経て二十八歳の春父祖の役を相續して、始めて與力たるに至りしが、此間の困苦實に大方ならざりきとぞ。幾何もなく翁は箱館奉行配下の定役に轉じ、彼地に在る事前後五年更に外國奉行定役に轉じぬ。其頃本郷金助町に拜領屋敷ありて、こゝに長女繁子ぬし、今の海軍少將瓜生外吉氏夫人は生れき。當時翁の役目は日に多端を極め、江戸に止まる事甚だ稀に、彼の小笠原島開拓の頃は水野筑後守に従ひて同島に押渡り、彼處に三年の月日を暮して江戸に歸り、更に命令黙し

(九四一)

がたく、池田筑後守に従ひて佛蘭西に使ひする事となりしが、
恰もよし孝氏は已に壯年に達し、殊に洋語を巧にせしかば、一
行の通辯として父子共に遠き彼土に航し、事なく使命を果し
て歸朝せしは、やがて慶應二年三月の事なりけり。翁は之と共に
に隠退して家督を孝氏に譲りしが、間もなく伊豆斐山の江川
太郎左衛門に招かれ、隱居の身を以て同地の租税出納の事務
を司る事となりぬ。斯て明治維新となりては、豫て斐山時代の
経験もあれば、四年の頃より大藏省に召出され、十五年まで
在職せしが、同年病を以て職を辭し、以て今に至りぬ。
翁が經歷の一般は大方以上に述べたる處の如く、身は元武家
に人となりしが、世の中、日毎に騒がしきに従ひ、江戸幕府の運

命漸く危く加ふるに、諸外國の來つて交も我に通商を迫るや、
當時外國奉行に従ひたりし翁は、炯眼早くも商業の將來大に
有望なるを觀破し、直に意を決して孝氏等に彼國の語學を修
めしめしは、やがて今日三兄弟が世の富豪と呼ばるゝに至り
し遠因なりと謂ふべく、猶翁が教育の主旨は豫て父祖よりの
遺訓を守り常に驕奢を戒めて慈善を事とするにありしが、積
善の家には餘慶ありとの諺に漏れず、孝氏兄弟が現時の狀態
は、正に翁が壯時の功を收めたるものならむ。
斯の如く世の大勢に鑑み、早う子息等に兩刀を棄てさせたる
程ありて、翁は決して頑固一徹の人ならず、今其一例を擧れば
今より恰も十七年以前下谷竹町の所有地内に會堂の設立せ

られたる時直に喜んで其信者となり、日曜毎に説教を聞くを
老後の二なき樂みとし、今猶日曜の朝早く根岸の閑居より常
に同所に通ふを怠らずとか。現時は兎も角其頃白髮の老翁に
て信者となりしは珍かなる事なるべし。さもあれ翁は節儉の
一方に掛ては又大に頑固なる處ありて其隱宅の如き下婢は
僅に一二人の外使用せず、衣食の如きも絶えず質素を旨とし
居れりとか。

名士の父母完

明治三十六年五月廿五日印刷
明治三十六年五月廿八日發行

(名士の父母奥付)

正價金貳拾五錢

(版 藏 堂 武 文)

製 複 計 不

著 者

安藤 箕輪 紫陽
藤 輪 撫 鬘

發 行 者

大 橋 省 吾

印 刷 者

東京市神田區美土代町二丁目一番地
島 連 太 郎

印 刷 所

東京市神田區美土代町二丁目一番地
三 秀 舍

發 兌 元 元

東京市日本橋區本町三丁目
東京市神田表神保町三番地

博 文 堂 館

大 賣 捌

大阪市備後町四丁目
名古屋市本町三丁目

盛 文 代 助 館

讀賣新聞記者關如來君著

表裝中村不折君畫
肖像寫真版刷挿入

明治の令嬢

〔訂正〕
〔再版〕

洋裝全壹册
正價金參拾錢
郵稅金六錢

明治の令嬢は上は貴顯縉紳の令嬢より下は貧困苦學の女學生に至る、才學絶群超凡、德行端嚴貞淑、探て以て明治の令嬢の模範となり規矩となるものは擧げて之を一卷の中に收めたり、以て世人が知らんとする高貴の家庭の如何を推知するを得べく、現今令嬢の如何なる學校及び家庭教育の下に生長して他日の良妻賢母となるべきを觀察するを得べし。況んや著者が文の筆力穩健、縦横變化、其人に因りて其筆を運び、刻畫精警、活動生くるが如し、以て家庭の好讀本とすべくまた以て令嬢の好伴侶たり

讀賣新聞記者鈴木光次郎君編

明治閨秀美譚

〔訂正〕
〔八版〕

袖珍全壹册
賣價金貳拾錢
郵稅金貳錢

浸潤膚受の力は、實に驚く可きものありて存す古來哲人傑士の、其母より受る感化の大なるは史傳之を示して炳焉たり、婦人は實に社會の潛勢力、賢母良妻の國家に裨補する所誠に測る可からざるものあり、本書は明治閨秀の言行實録にして實に社會の鑑鏡たり。

藏版書類

● 現	● 詩新	● 韻美文	● 韻美文	● 良材	● 下	● 世界一	● 偉	● 處	● 實	● 將今
代	花	溪	創	美	獄	權	人	世	業	倫
女	柘	韻	作	辭	謀	謀	修	要	之	理
氣	櫛	松	要	寶	學	學	錄	訓	帝	及
質	櫛	聲	訣	典	記	學	錄	訓	國	宗
										教
櫻井鷗村君著	國府犀東君著	結城素明君著	嘸嘸庵主人著	西村眞次君著	西村眞次君著	田岡嶺雲君著	田口卯吉君著	金井啓一君著	杉浦重剛君著	風間禮助君著
中村不折君畫	(訂正第四版)	(訂正第四版)	西村眞次君著	西村眞次君著	西村眞次君著	田岡嶺雲君著	田口卯吉君著	金井啓一君著	杉浦重剛君著	風間禮助君著
正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢	賣價金拾四錢	賣價金拾四錢	正價金參拾五錢	正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢	賣價金拾五錢	郵稅金拾四錢	正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢
正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢	賣價金拾四錢	賣價金拾四錢	正價金參拾五錢	正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢	賣價金拾五錢	郵稅金拾四錢	正價金參拾五錢	郵稅金拾四錢

類書版藏

● 魔法	● 理科	● 初航	● 海軍	● 塔中	● 武俠	● 少年	● 世界	● 家庭	● 家
● 醫者	● 春秋	● 海軍	● 艦隊	● 怪艦	● 日本	● 婦人	● 譚	● 歌	● 庭
● 水田南陽君譯 (訂正第貳版)	● 木村小舟君著 山中古洞君畫	● 櫻井鷗村君譯 (訂正第七版)	● 押川春浪君著 (訂正第五版)	● 押川春浪君著 (訂正第三版)	● 押川春浪君著 (訂正第二版)	● 櫻井鷗村君譯 小島沖舟君畫	● 櫻井鷗村君譯 每編口畫挿入	● 植民少年 航海少年 朽木の舟	● 決志少年 漂流少年
● 實價金拾貳錢 郵稅四	● 實價金貳拾錢 郵稅四	● 實價金參拾錢 郵稅四	● 實價金貳拾五錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金拾五錢 郵稅四	● 實價金參拾錢 郵稅六	● 實價金貳錢五厘 郵稅貳錢宛	● 實價金貳拾五錢 郵稅四

類書版藏

● 名家	● 逸事	● 希臘	● 御伽	● 倫理	● 二都	● シザ	● 對話	● 實業	● 富之福
● 小叢	● 叢話	● 神話	● 想	● 譚	● 語集	● 國音	● 富之福	● 實業之福	● 富之福
● 津田梅子女史 (訂正第五版)	● 櫻井鷗村君校 (訂正第五版)	● 津田梅子女史 (訂正第三版)	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著	● 津田梅子女史 (新刊發覽)	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著	● 櫻井鷗村君撰 ホーマー原著
● 實價金參拾五錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾五錢 郵稅六	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四	● 實價金四拾錢 郵稅四

近刊書類

エー、シー、ハー、ツホーン女史著

文英

アーサー王物語 全壹冊

正價金四拾錢 郵稅四錢

リッデル女史英譯 村田丹陵君挿畫

和英對譯
日本昔噺

猿 蟹 合 戰 巖谷小波君新訂

洋裝頗美本 正價金拾參錢 郵稅金四錢

押川春浪君新著

傳奇 銀 山 王 全壹冊

正價金參拾五錢 郵稅四錢

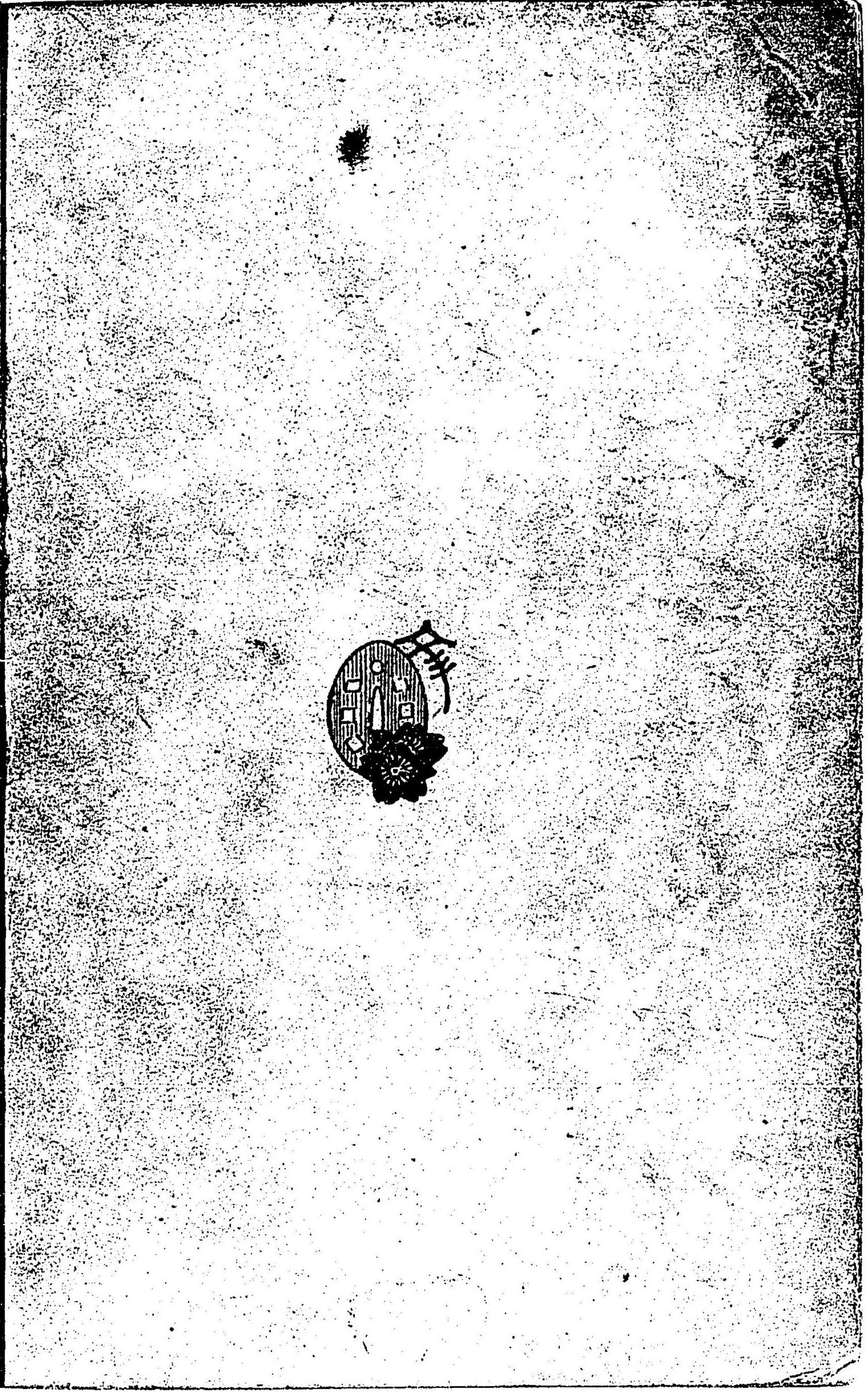
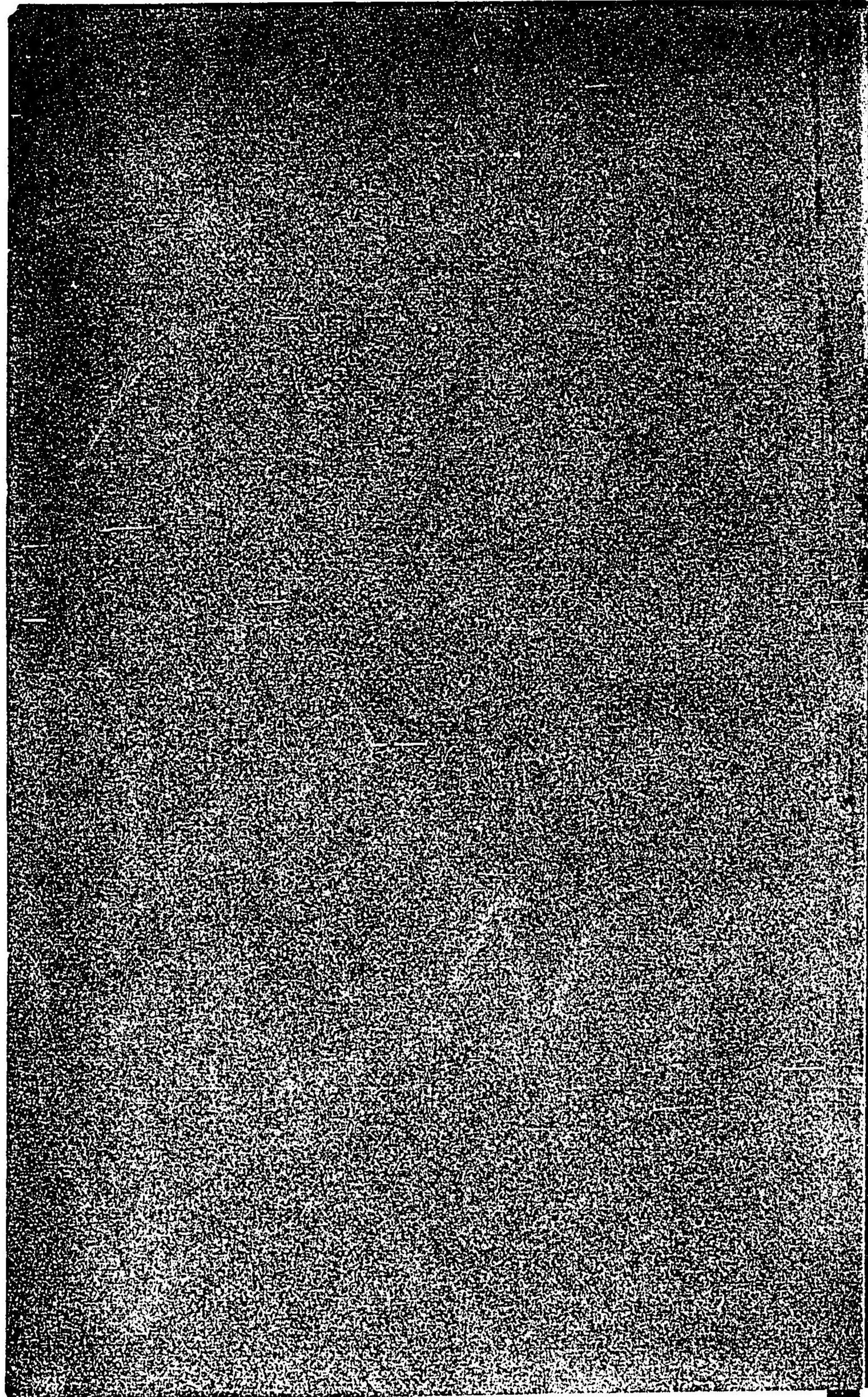
中島義弼君著

新撰女子作法書

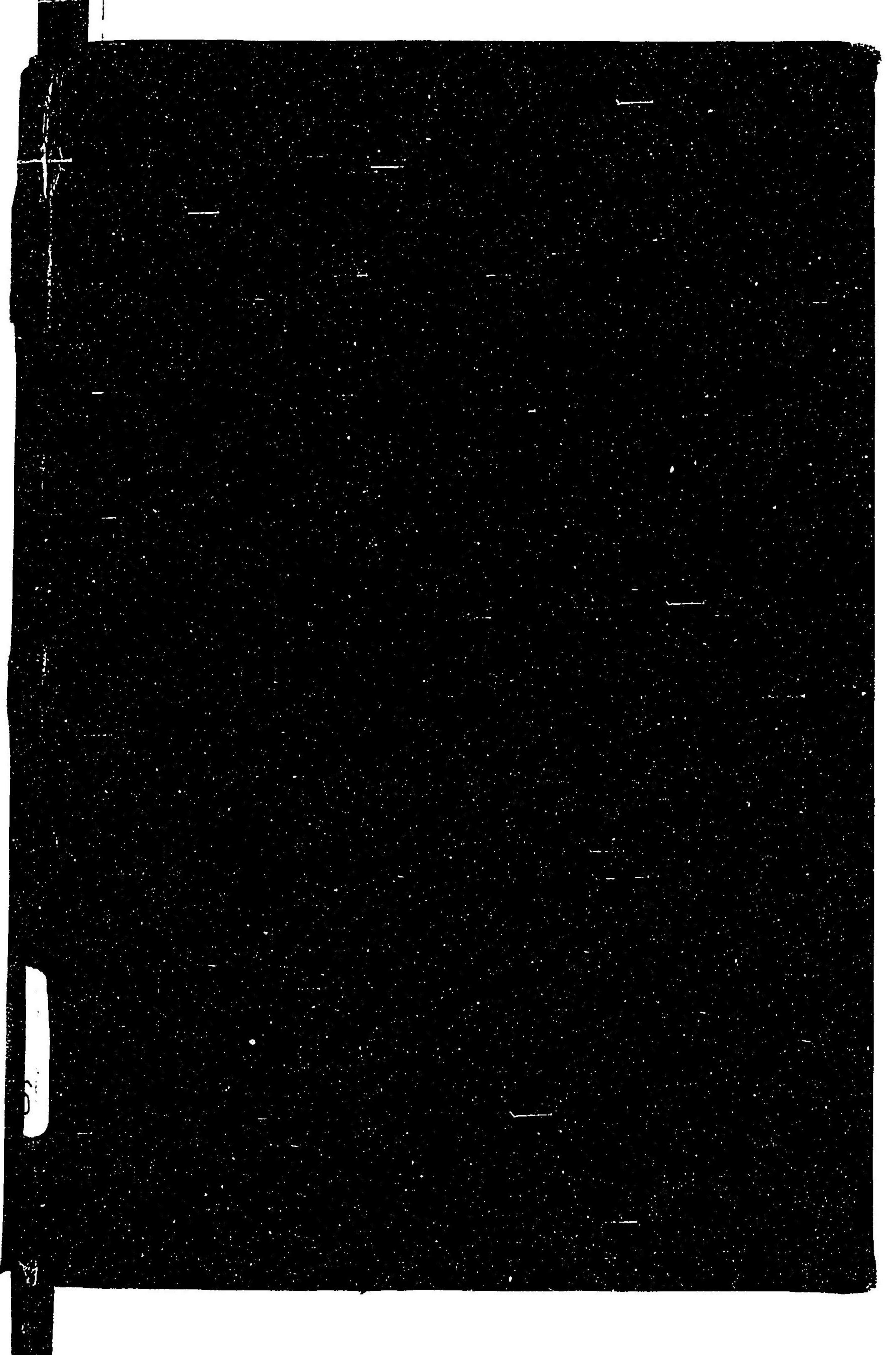
定未價正 ● 入挿個十數圖刻彫版木

(一一)

96
255



96
255



005094-000-6

96-255

名士の父母

安藤 紫陽 / 編

M36

ACE-1895

